

アルフォンよ永遠に

遠野秋彦

プロローグ

学会の歴史発表は続いていた。

「そのようなわけで、地球に残る太古の宇宙戦艦ヤマト伝説の主役たるコダイスム。しかし、その実在は疑わしい。このコダイという言葉は、当時の地球の日本エリアで使用された日本語において、太古の時代を意味する単語なのです。ですから、太古の時代の寓話を示唆するためにあえて付けられた名前ではないかと思われます」

そこで客席から童顔でメガネの女性が手を上げた。

客席がざわめいた。

サナダ教授だ……、あのサナダ教授……という声が聞こえた。

発表者は発表を中断して言った。「なんでしょう」

「残念ながら」と女性は言った。「コダイスムは実在の人物です。最後のヤマト乗組員として私はコダイスムの本物を見えています」

「しかし、根拠はあなたの記憶しかありません。記憶は歴史の根拠とするには弱い」

「仰ることはごもっとも。しかし、イスカンドロイドの記録機構に残った情報が歴史の史料たりえるかについて、定説はまだ出ていません」

「事実と承認することも、否定することもできないわけですね。しかし、イスカンドロイドは宇宙ひろしといえどもあなたしか存在しない。二人目が誕生する見込みも無い。何しろ発見されたイスカンドロイドの設計図はあなたのものだけだ」

「そうです」

「定説が生まれるほど広まるか疑問です」

「それも同意します。しかし定説が無いことには変わりありません」

「しかし、状況はコダイスムの実在に対して不利と言わざる得ません。同一人物であるはずなのに、イスカンドルから帰り着いた時点で特攻して死亡したとする情報と、白色彗星戦役で超巨大戦艦に特攻して死亡したと

する情報と、天寿を全うしたという情報が錯綜していて、とても筋の通った解釈ができません」

「異説が多いのは、昔の有名人の共通特徴です」とサナダ博士は童顔にかけたメガネを直しながら、冷静に告げた。「しかし、異説が多いから実在しないという話にはなっていません。同じ時代のトードー・ヘイクローも、死んだのは暗黒戦役か、その後も生きて天寿を全うしたのか解釈が分かれています、それでもトードー・ヘイクローの実在は誰も否定していません」

「しかし……」

発表の時間が終わり、サナダ教授は人の流れに乗って階段教室を出た。

そこに、「ミオ〜〜〜っ!」と駆け寄ってくる女性がいた。

「スーちゃん、待っててくれたの?」

スーちゃんとは、スノーホワイト・モリという女性だった。モリユキの子孫という触れ込みだったが、それは怪しかった。本人もそれほど信じている訳ではない。そもそも、サナダ教授の記憶が正しいなら、当時の日本人女性は結婚した時点で姓を変えたはずだ。モリはおそらくコダイになったはずだ。

「しかし、あんたって本当に成長しないわね。凄い童顔よ」

「イスカンドロイドは成長しないの。永遠にこの姿のままよ」

「だから浮いてるわよ。その顔じゃ学生よりも若く見えるって」

「この野暮ったいメガネで老けさせているのよ」とサナダ教授はメガネを直した。

「それもどうかと思うけどね」

その時、サナダ教授を見ながらひそひそ話をしている者達が近くにいた。彼らは言っていた。

「サナダ教授って誰?」

「地球史研究の第一人者。サナダ・ミオ教授だよ。このアクエリアス・ユニバーシティのエース研究者の一人さ」

「でも、ヤマトの乗組員だったって本当? あれって大昔の戦艦でしょ?」

「本当らしいぞ。アクエリアス・ユニバーシティの創立百周年記念式典で倉庫の大搜索をやったとき、設計図と記憶キューブが見つかったそうだ。当時は無理だったけれど、現在の技術なら完全にイスカンドロイドを再現出来ると分かって再建されたそうだ」

そうだ……とサナダ教授は思った。

あのとき自分は再建された。

残されていたデータは、ヤマトを降りる直前にバックアップした人格データだ。だから、そこまでの記憶はある。ヤマトのコダイもよく覚えている。

そして、その後に何が起きたのかは不明確だった。

だから、彼女は歴史学者になった。

デザリウムと暗黒銀河が崩壊した真相を突き止めたかった。その中で自分は死んだのだから。

しかし、ヤマト神話は彗星帝国神話と並んで学会では人気のあるテーマだった。異説、異論が多いからだ。そもそも宇宙戦艦ヤマトの建造時期も、戦没時期もコンセンサスが取れていない。ヤマトに乗り組んだ経験のあるサナダ博士にしても、建造と戦没に立ち会っておらず、記憶では何も言えなかった。

もちろん、いくつかの事実は知っていた。ヤマトの波動エンジンは、イスカンダルの技術供与によって建造された。だから、イスカンダルからの使者が地球に行く前に建造を開始できるわけがない。ところが、波動エンジン以外のヤマト本体はそれ以前から地球脱出用に建造が進んでおり、地球歴一九四一年には既にヤマト本体は落成していたという説が無謀とは言えなくなってくる。

いずれにしても、サナダ教授が産まれる前の話だ。

「じゃあ食堂に行きましょう」とスノーホワイトは言った。

「ええ」

しかし、そこで、話しかけてくる者がいた。

「サナダ教授、サナダ教授ですね？」

見慣れない顔だった。

サナダ教授は足を止めて「なんでしょう」と言った。

「良かった。お見かけしたのでお耳に入れようと」

「何をですか?」

「私の専門はアマール史です。研究者のカンサク・バッツと言います」

「アマールですか」

「ええ。地球との関係があるアマールです」

「それで?」

「アマールには地球からの移民船団の残骸も残ってしましてね。それを調査中に面白いものが出てきましたよ」

「なんでしょう」

「黑色情報部少尉の手記です。ええと、つまり、地球を電撃的に奇襲して、返り討ちに遭って電撃的に壊滅したとされる黑色星団帝国の情報部少尉の手記です」

「なんですって? ほとんど何も資料が残っておらず、謎が多いとされる黑色星団帝国ですか?」

「そうです」

「しかしなぜ……」

「この少尉は、地球人の身体を得てずっと地球人として暮らしていたようです」

「まさか」

「地球人と結婚し、子供まで作りました。その子供の手が掛からなくなってから手記をまとめたようです」

「事実なら大スクープよ」

「しかし残念ながら私には読み解けない部分が多い。地球研究の権威であるサナダ教授のお力をお借りしたいと思っていました」

「詳しい話をお聞かせ下さい」とサナダ教授は身を乗り出した。

「ミオ!」スノーホワイトがむくれて叫んだ。

「悪い、スーちゃん、お食事会はまた今度にして」

「分かったわよ!」スノーホワイトは立ち去った。

「では手記の本物をお見せしますよ。こちらへどうぞ」

「よろしくお願いします」サナダ教授は頭を下げた。

第一章 快樂

アルフォン少尉には、物事を斜めに見るクセがあった。

全く性格的なものであり、理由など無かった。

だから、同僚が手頃な肉体を求めて地球人狩りに出ている、積極的に同調する気になれなかった。

確かに、黑色星団帝国の地球に対する奇襲は 99%成功した。

勝利に酔うことも、目的とした地球人狩りを行うことも当然と言えば当然だ。

地球人狩り……。

ある意味で愚劣な行為だった。

首から上だけが生身で身体を全て機械に置き換えてしまった黑色星団帝国が、改めて生身の身体を欲しがった結果だ。

もちろん、黑色星団帝国の技術力があれば、地球人を狩ることなく生身の肉体ぐらい作り出すことができる。遺伝子からクローニングで身体を作り出せば良いのだ。そして、首から上が生身である以上、誰もが遺伝子をまだ持っていた。そう、話はとても簡単であるはずだ。

しかし、ここからが黑色星団帝国の愚劣なところだった。

反乱の意図あると見なされ、生物学者、技術者が大量に虐殺されたのだ。もちろん、それは冤罪だ。情報将校として機密の報告書を読んだアルフォンはそれを知っている。ライバルが彼らを悪人に仕立て上げ、国家は叛逆を認めないからだ。そして、間違いが発覚したときには、再生医療を行う人材は壊滅していた。そして国家は間違いを認めない。それも黑色星団帝国の愚劣さの 1 つだが、冤罪の事実隠蔽された。

そして、生身の身体を欲しがるムーブメントが発生した。世の中も黑色星団帝国の誰もが世の中が上手く行かない理由を、機械の身体は生身の身

体に劣るという理由に求めたがったからだ。しかし、機械の身体が生身の身体に劣るというデータは実際には何も出ていない。

時を同じくして、黑色星団帝国の決定的なライバルたるボラー連邦は、ガルマン・ガミラスという新しい敵の勃興を受けて、黑色星団帝国にちょっかいを掛けるのをやめた。その結果浮いた戦力は投入先が模索され、大マゼラン星雲で偶然遭遇した地球に狙いを定めた。軍縮ムードで防衛が手薄になっていたことも、状況を後押しした。戦時下のボラー連邦よりも、平和な地球を奇襲した方が成功率は高そうだ。

そのような事情の連鎖により、地球への奇襲は計画され 99%の成功を収めた。

地球の全土は既に黑色星団帝国の制圧下にある。

あとはよりどりみどり、好きな身体を奪って自分の意識を移し替えれば良い。

だが、本当にそれで良いのだろうか。

アルフォンはそこが疑問だった。

だから、地球人狩りには同行できなかったのだ。

成功せず、残された 1%。

たとえば、宇宙戦艦ヤマトの確保失敗だ。

地球の研究中、過去に発射された宇宙戦艦ヤマトの波動砲より、黑色星団帝国にはやっかいな要素が発見されていたのだ。宇宙戦艦ヤマトのエンジンは原始的であり、不純物が混じっている。エンジンを換装しても傾向が同じなのだ、おそらくノズルの形状に起因する問題なのだろう。同じ地球艦でも、ノズルの形状が違う他の艦には同じ成分は含まれない。戦時下の工法で、しかも未熟な理解で建造されたヤマトだけが持つ特徴だ。その結果、ヤマトの波動エネルギーは少々効率で劣るのだが、逆に黑色星団帝国には脅威になっていた。

その不純物の名は波動雑粒子。

それが黑色星団帝国最強の装甲の隙間に入り込んで、無敵の装甲を無力化してしまうのだ。しかし、他の兵装で攻撃された時は無敵の防御力を発

揮するので、外すわけにも行かない。まさに黒色星団帝国のアキレス腱だった。

わざわざそんなアキレス腱を持つ相手を奇襲するなど愚かではないか、とアルフォンは思うが、作戦は強行された。生身の身体を欲しがる世論には勝てなかったからだ。

これも愚かなことだとアルフォンは思った。

アルフォンは、地球の大統領の官邸の地下を歩きながら考えた。

本当に黒色星団帝国は地球占領を続けることが出来るのだろうか。もちろん、全ての地球人を黒色星団帝国人の身体にしてしまえば反乱などあり得ない。しかし、意識を転送するマシンはとても少ない。アクエリアスの遺産であって、我々には製造できないからだ。そのようなマシンに依存した作戦はとてもリスクイダ。

あれは、重核子爆弾内部に組み込んで地球に降下させた 1 基の他には本星に 1 基あるのみだ。もし、重核子爆弾内部の 1 つが破壊されたら、いちいち本星まで戻らねば身体の交換ができない。もし、それも破壊されたら、計画が遂行不可能になる。いや、破壊されずとも故障するだけで計画は頓挫する。とても杜撰な計画だ。

それにしても綺麗でシンプルで上品だ、とアルフォンは大統領官邸の地下を見ながら思った。黒色星団帝国本国の施設はもっと暗くて悪趣味だ。それはスカルダートの好みであって、黒色星団帝国臣民の好みというわけではなかった。しかし、長いものには逆らえないのが黒色星団帝国であった。

アルフォンが大統領官邸を歩いているのは理由があった。

情報部の将校として何か有益な情報が得られないかと、率先してここに派遣されたのだ。

しかし、それはあまり意味のあることではなかった。今さら防衛陣地の場所を明らかにしても、既に制圧済みなのだ。

だから、アルフォンは職務を果たしている振りをしながらぶらぶらと地下を探検していた。

同僚は既に職務を放棄して地球人狩りに行ってしまったようだが、他の部隊でも状況が同様だった。

アルフォンはふと不自然に開いた扉を見つけた。

誰かがここに来たのだろうか。

いや、このフロアに最初に足を踏み入れたのは味方ではアルフォンが最初であるはずだった。

アルフォンは銃を抜いて警戒しながら半開きのドアを開いた。

見ると、ガランと広い空洞があった。

何かの秘密発着場のような雰囲気だった。

上を見上げると地上に大きな穴。

下を見るとコンクリートの床には焦げ跡。

おそらく大統領の緊急脱出艇だろう。それが脱出した跡というわけだ。しかし、大統領の身柄は黒色側で確保済みだ。逃げ出したのは他の誰かに違いない。

アルフォンは、通信機のスイッチを入れた。

「アルフォンだ、連絡艇が発進した痕跡を発見した。敵機が大統領官邸から発進しているはずなので、記録を照会して欲しい」

しかし、待っても応答はなかった。

どうやら、部隊の通信士も地球人狩りに行ってしまったらしい。

アルフォンは肩をすくめた。記録の照会はあとでもできる。

そのとき、アルフォンは床に倒れている人影に気付いた。白い肌。地球人だ。

アルフォンは駆け寄った。

倒れているのは若い女だ。

しかも美しい。

重傷を負っているようには見えない。

ショックで気を失っているだけだろう。

アルフォンは気がつかないように麻酔弾を撃ち込んで、正体を探るべく顔の照会を行った。通信士がいなくてもその程度はできる。

トードー地球防衛軍司令長官の秘書、モリユキか。

アルフォンは非常に良い拾いものをしたと分かった。

これは大物だが、過剰に大物過ぎるわけではない。

つまり、重要な会議への出席が認められるが、主要な発言者にはならなくて済むポジションだ。

情報部のシミュレーションでは、地球人の有志がパルチザンになることは予想されていた。そのパルチザンに潜入するには、最適な身体ではないか。

それに……。

アルフォンは思った。

目が離せないほど美しいではないか。

彼女が欲しい。

パルチザンの件は、彼女が欲しい気持ちを正当化する理屈であった。

アルフォンは通信機を取り上げた。

「重核子爆弾の意識転送装置の管理者へ。利用を申請する。情報部のアルフォンだ。どうだ、順番を前倒しして、融通を利かせてくれないか？ 身体？ それは準備済みだ。とびきり上等な奴をだな。そうそう。地球人の意識データは保管しておいてくれ。あとで仮想シミュレーションに入れて研究したい」

相手は文句を言った。当然だ、アルフォンは長い行列に横入りしようとしていたのだ。いやだいやだ。だから最初から計画に無理があったのだ。地球は電撃的に占領できても、黒色人の大多数はすぐに生身の身体にならない。そのためには長い行列を待つ必要があり、その間は地球人パルチザンを警戒しなければならない。

「潜入捜査用だ。優先権は情報部にあるはずだ。文句を言わず融通を利かせろ」とアルフォンは畳みかけた。

相手は不承不承納得した。

しかし、これでも装置が1つ地球にあるだけマシだった。もしも、40万光年彼方のデザリウム本星に戻らねば意識を移動できないとしたら、それ

こそ危険な地球人を本星に大量に連れ込むことになって危険きわまりない。
逆にいえば、これこそが重核子爆弾の秘密そのものだった。

重核子爆弾とは、地球人を恫喝するためのシンボルとして送り込まれてはいるが、本当はこの装置を地球に持ち込むための安全な入れものとして用意されたものなのだ。もちろん、重核子爆弾には重核子爆弾としての機能があり、地球上の全人類を死滅させる能力はある。特定種族の脳だけを選択的に破壊する能力があるとされ、黑色星団帝国の切り札として投入されたものだ。つまり、地球人が逆らうようなら地球人の脳だけを破壊し、身体は丸ごと黑色星団帝国が手に入れるという実に素敵な兵器だ。

しかし、それが計画を強引に推し進めるために推進派がでっち上げた夢想であることをアルフォンは知っている。情報部の将校として重核子爆弾の資料には目を通したからだ。黑色星団帝国人と地球人は、同じ遺伝子を持っていて混血可能だ。同じアクエリアス・チルドレンなのだから、当たり前と言えば当たり前だ。それは裏を返すと、黑色星団帝国人と地球人の相違は些細であり、選択的に地球人の脳だけを破壊することはできないことを意味する。これが重核子爆弾だけ先に地球に送り込んだ理由だ。一緒に侵攻したのでは、黑色星団帝国人の脳まで破壊されてしまう。

逆にいえば、作戦の第2段階つまり地球上への黑色兵士の降下が始まった時点で重核子爆弾は実質的に使用不可能になったのだ。

もちろん対策はあることになっている。

万一に備え、重核子爆弾の起動スイッチは2つある。そしてデザリウムまで行かねば完全に解除できないようになっている。だから、本格的な反体制活動が勃発すれば戦力の主力はデザリウムに向けねばならないように仕組んである。もちろん、40万光年を航海する途中で襲撃して殲滅してしまう前提だ。途中で補給もままならいレジスタンスの艦隊など、大中間補給基地を持つ黑色星団帝国の敵ではないはずだ。

しかし、アルフォンに言わせれば甘い見透しだった。なぜかといえば、行きがけの駄賃で大中間補給基地を撃破されてしまえば、立場はイーブンになってしまうからだ。大中間補給基地護衛のための戦力派遣を具申して

はみたものの、それは却下された。それだけの戦力を用意できないからだ。大マゼラン星雲でのガミラス、イスカンダル、地球との不期遭遇戦で失われたプレアデスやゴルバの穴を埋める戦力はまだ補充されていないからだ。つまり、作戦の発動が拙速すぎる。

万一大中間補給基地が撃破され、艦隊戦でも負けた場合の対策として、デザリアムは未来の地球を偽装する計画になっていた。聖総統自ら発案された偽装案なのだが、穴だらけでどこからどう見ても無理のある子供の計画だった。ほとんど使用することがあり得ない計画だからそれでも良いのかも知れないが、事前演習では地球人に変装しての地球人ごっこをずいぶんと楽しまれた。聖総統が意図したのがデザリアム防衛ではなく、地球人ごっこであることが良く分かる。つまり、税金を無駄遣いして聖総統は個人的な遊びに興じたのだ。聖総統は、収集した地球の古典の中から、クレオパトラとアントニウスの物語をいたく気に入り、自分に心酔するサーダをクレオパトラ風にしたり、地球偽装計画で建造する施設の中にエジプトらしさを演出するスフィンクスを入れさせたりした。いや、それをやりたいからこそ、地球偽装計画を言い出したのかも知れない。

そして、計画案では地球偽装計画が破られたときは、重核子爆弾を炸裂させるという最終手段が明記されていた。それは実質的に在地球の同胞を巻き添えにして敵を殲滅する最後の手段だった。

それにも関わらず、その報告書を読む権限を持つ者達の大多数まで地球侵攻に志願したのは、事態がそこまで行くとはい誰も思っていなかった上に、良い肉体は奪い合いになると予想されたからだ。現地に行って好みの身体を迅速に確保したいと誰もが思っていた。

その風潮に対してアルフォンの態度は冷ややかだった。

それにも関わらず、アルフォンがこうして地球に来たのは、地球にはまだ未知の要素が多く、情報部が丸ごと総動員されたからだ。

もちろん、アルフォンはそのような状況を肯定しない。それは言い換えれば、事前調査不足なのだ。もっと情報を集めて必ず勝てる戦略を練ってから行うべき作戦なのだ。しかし、報酬があまりにも魅力的すぎて 9 割の

案でみなは妥協して推進されてしまった。

もちろん大義名分はある。

白色彗星戦で消耗した地球の防衛戦力はまだ回復していない。人手が足りないので、有人艦はほとんどモスボールにしてピンチヒッターの無人艦隊が警戒しているような手薄なタイミングは今しか無い。だから今攻めるべきなのだ、という話は一理あるように見える。

しかし、一時除籍されてモスボールされた主要艦艇の所在は、ほとんど掴めていない。もちろん、その中にはヤマトも含まれる。そもそもモスボールが偽装だったらどうする気なのだ。あるいは、レジスタンスが簡単にモスボールを解除して艦隊で奇襲を仕掛けてきたら、争って身体を欲しがってばかりの味方はどうなるのか。敵に対する警戒などしていない。司令部も一般兵士も勝った勝った、完璧な勝利だと沸き上がるばかりで冷静さを欠いている。

まあ、走行する列車の窓から銃撃を行って乗客を惨殺するという戦略的も戦術的にもあまり意味の無い作戦を喜んで立案する司令部と、何も異議を挟まず実行する一般兵士だ。期待するだけ無駄かも知れない。あの作戦で無駄に地球人の怒りを買って、レジスタンスの活動を活発化させる怖れもあった。つまりアルフォンの所属する情報部の仕事が増える。

そういう意味で、アルフォンは黒色星団帝国の勝利をあまり信じてはいなかった。

強烈なしっぺ返しを占領軍が食らって、撤退を余儀なくされることも考えられた。

ああそうか。

だからこそ、職権を乱用してまで、素早く生身の身体に移り移ろうとしているのか。

アルフォンは自嘲した。

しかし、それで行動をやめる気は無かった。

たとえ、アルフォンの考えが杞憂だとしても、この身体は貴重だ。年齢20歳前後の美しい女性の身体は数が少ない。奪い合いになるのは目に見え

ている。

年齢 20 歳前後の美しい女性の身体奪い合いになる理由は簡単だ。

年寄りや余命が短すぎるし、身体に故障も多い。回復力も劣る。

子供は大人なら当然として実行できること未成熟であるために実行できない可能性がある。

年齢 20 歳前後はその意味で理想的だった。

美醜は人の趣味ということもできるが、機械的に成形していた黑色星団帝国の臣民は、余りにも劣る容姿にはなりたくないだろう。

そして問題は「女性」というファクターだ。

身体を機械化した黑色星団帝国の臣民にとって、性別とはあまり重要なファクターではなかったはずだ。男で産まれようとも女で産まれようとも、身体のパーツを交換することで、男としても女としても生きるのは簡単だ。男と女を往復することも簡単だ。

そして、世代を重ねることで黑色星団帝国の臣民はユニセックス化していった。アルフォンの世代になると、既に性別を意識する者などいない。そもそもセックスをしない。遺伝情報から工場で子供を製造するので、会ったこともない相手との子供が産まれることもあるし、それどころか同じ性別の臣民間で子供を作ることも日常だった。

事実としてアルフォンの両親はどちらも男だった。

しかし、それを気にする者は誰もいなかった。

あの報道が突然多くの臣民の心を捉えるまでは。

生身の身体で行うセックスは快感 3 倍。身体が生身から機械に移行する過渡期の者が書いたメモが発見されたのだ。

突然降ってわいた生身ブームだ。

しかし、技術を持った人材は肅正済みだ。

聖総統府の技術院は技術復興の二十年計画を発表したが、とてもみんなが待てる時間ではなかった。

しかし、手に入らなければ、いろいろな模索が始まる。

その結果、更に発掘されたのは昔の人間が語ったという「女の方が快樂

は深い」というものだ。

結果として、社会的なコンセンサスができた。

生身のセックスは快感が3倍で、女性ならば更に3倍。

そのように信じる者が多かった。

だから、女性の身体を求める者が多いのだ。誰だって、3倍の快樂よりも9倍の快樂に興味があるのだ。

しかし、アルフォンはそれを俗説に過ぎないと割り切っていた。アルフォンの試算では、快樂信号の強度を規制値以上に上げれば、機械の身体であろうと同程度の快樂は得られるはずであった。そして、性別の差は単なる快樂の強度ではなく、性質の差として捉えるのが妥当だろうと割り切っていた。

それにも関わらずアルフォンが女の身体を欲したのは「愛する男の子供を産む」というシチュエーションへの憧憬が理由であった。はるかな祖先は当たり前のように行っていたことだ。しかし、ここ最近が行われたことがない。工場で子供を製造するのではなく、自分のお腹を痛めて子供を産んでみたいのだ。そのための男と行う子作りの儀式は、さぞや素晴らしいものであろう。

アルフォンは倒れていた女の身体を車に乗せ、重核子爆弾に走った。

街は平穏だった。子供っぽい示威行動で破壊した一角を除けば、建物はほとんど無傷で、明かりも煌々と点灯している。行き交う人や車の数は少ないが、街は明るかった。その点で、情報部の進言は効果を発揮したらしい。すぐに希望者全員の意識データを転送できない以上、生身の身体を維持するために地球人の社会は維持されねばならない。社会インフラを破壊するようなことは避けるべきだったのだ。

そこで、アルフォンは少し健全な事実気付いた。

この身体に問題が無いか検査しておく意味はある。

アルフォンは車の走行をオートに切り替えると、助手席に乗せた女の身体に手を伸ばした。

薬で眠っている女が目覚める気遣いは無かった。

アルフォンは改めて、柔らかい胸の膨らみや、股間の茂みを指で確かめた。

アルフォンは地球の文化で言う痴漢行為を行っていることになる。

アルフォンはそこで考えた。

こうして無遠慮に身体の各所をチェックするために触られるのは、触られる側としてはどう感じるものなのだろうか。

意識の交換後なら、触られる側の意識はアルフォン自身になるはずなのだ。

そのとき、アルフォンは自分の意識が高ぶるのを感じた。

内部センサーをチェックすると、自分の脳が興奮していることが分かった。

このまま対女性用のセックス・アタッチメントを装備すれば、眠り続けるこの女を犯すことができる。

しかし、アルフォンはその気になれなかった。

理由は良く分からなかった。

それよりも、はやくこの女の身体を得て、同僚の車の助手席に乗ってみたい。そして、無遠慮に身体に触られるという経験をしてみたい……。

アルフォンは車の自動運転を解除すると、アクセルを踏み込んだ。そして規定速度の2割増しで飛ばした。

アルフォンは、重核子爆弾に到着すると、情報部特権で一般立ち入りが認められない区画を突っ切って、重核子爆弾の奥深くに設置されたアクエリアスの装置に到着した。この機械が意識を転送することを可能とする。理論は完全に解明されていなかったが、役に立つので利用されている。そして、かなり巨大だ。同時に、100 人の人間を扱う能力があるからだ。これが大きいように見えてそれほどでもない。1 回の処理に 8 時間掛かるから、1 日あたり 300 人しか処理できない。これを、帝国の百億の人間全員が利用するとすれば、33333333 日間掛かる。これは月数に換算すると百万ヶ月以上であり、これは約 10 万年にあたる。もちろん、帝国の全ての人間が生身の身体を求めているわけではないが、それにしても希望者全員が機

械を使える見込みは全く無い。100 万人規模の処理能力があるデザリラムの装置を動員しなければ辻褄が合わないのだ。

実はこの点でも計画はずさんだった。

これだけの人数を運搬するために、大規模船団を組む必要があるのだが、実は黒色側では数を揃えられていない。充足できたのは必要量のせいぜい3割か4割だ。残りは地球で宇宙船を徴発できることを前提としているが、本当に徴発できるか否かを確認した者はだれもない。

アルフォンは機械に入って目を閉じた。薬物が噴射されてアルフォンは眠った。

突然、身体に思ってもいない活力が沸いてきて、アルフォンは自然に目を開いた。

世界が違って見えた。

「ラッキーでしたね、アルフォン少尉」と係員が声を掛けてきた。

「なぜだ?」

「機械がオーバーヒートしたらしく、いくらスイッチを押しても動かなくなっただけです。アルフォン少尉は上手く動いた最後のグループですよ」

「なんだと? 復旧するのか?」

1 時間でも機械が止まるとパニックがやっかいだ。あまりにも長い行列が外に出来ているのだ。

「分かりません」と係員はお手上げであることを示した。「何しろ我々には動作原理も分からない機械なのです」

「それもそうだな。早急な復旧を期待するよ」

「それはそうと、アルフォン、服を着て下さい。服はこちらに保管してあります。気温は肌寒いと思います」

「確かにそうだな」

アルフォンは、女の着ていた服を手にした。

しかし、着る方法が分からなかった。いかに情報部といえど、そこまでは調査していなかったのだ。

「あの女の記憶データはどこだ?」

「このキューブに保管してあります」

「仮想世界に放してやれば、そこで会って話ができるな？」

「なぜそんなことを？」

「この服を着る方法が分からない」

「ああ、そういうことですか。でも、ここにある仮想現実装置は使えませんよ」

「なぜだ？」

「全部ワンセットでシステムがダウンしてしまったからです」

「重核子爆弾本体も止まってしまったのか？」

「あちらは大丈夫と思います。止まったのはこちらのシステムだけです。でも、あっちに仮想現実装置などありませんよ。ただの爆弾ですから」

「そうか。ならばくれ。あとで見よう」

アルフォンはキューブを受け取った。

その時、話に割りこんでくる者があった。

「あらまたなのね」やや年配の地球人女性だった。「ええと、アルフォンさんね」

「お前は誰だ？」

「地球人の協力者よ。名前はマリア」

やや年配の女性は挨拶した。

「地球人か？」

「そうよ」

「なぜ、ここにいる。我々を敵だとは思わないのか？」

「敵ね。そうね。ここでは罪もない人たちが、気に入られたという理由だけで身体を奪われているわ。それは許しがたい犯罪行為であり、殺人そのものだわ。でも、私はあなた方を受け入れました」

「そこが理解できない」

「あなた方が助けを求めているように見えたから」

「なに？ 我々が地球人を支配したのだぞ。助けを求めたわけではない」

「その話は後にしましょう。あなたも地球の女性の服を着る方法が分か

っていないようね。今説明するわ」

「どうした。さっきからこちらの顔を見て」

「いえ。有名人に似ていたから。もしかして、その身体は森雪さんの?」

「モリユキ……。そうだ、モリユキだ。顔を照会したらそういう名前だった」

「驚いたわ。地球を救った英雄の1人なのに、身体を奪われるときは一瞬なのね」

「それがどうした」

「街を歩けば森雪と見なされて話しかけられると言うこと。どう対処するか考えておくべきね」

「なるほど。地球を救った英雄の1人か。ならば、その者の身体がアルフォンによって奪われたと大々的に発表すれば地球人の意志をくじくことができそうだな」

「やぶ蛇だったようね」

「率直な所を聞きたい。君は、黒色に協力する気がどの程度ある? 反乱ができる機会があればすぐにでも反乱するか?」

「反乱なんて、しないわ」

「なぜ?」

「いいこと? 地球はね。ガミラス戦役で一度滅び掛かったのだ。そこで学んだことは、生きるためには手段を選ばないってこと」

「しかし、重核子爆弾が炸裂すれば、反乱分子も協力者も関係なく殺されてしまうぞ」

「家族を連れて地球を脱出できる宇宙ヨットを提供してくれると言ったわ。そうすれば大丈夫」

「本当か?」

「ええ。書類も書いてもらったわ」

「見せてくれ」

「良いわよ」

マリアは鞆から書類を取り出した。

占領軍が占領民を上手く騙して使っているのかと思ったので、チェックしてみた。

しかし、太っ腹なことに、書類には正規の認証マークが入っていた。

つまり、この書類には法的な拘束力がある。聖総統の気まぐれ一発で反故になる危うさはあるものの、そうではないなら違反すると法廷に行ける。もちろん占領軍の統治下ではデザリアムの法廷まで行くのは無理だろうが、傀儡の新政権さえ成立させれば占領軍の統治は終了する予定だ。上手く行けば一ヶ月程度でそうなるだろう。

「驚いたことに本物だ」とアルフォンは書類を返した。

「良かったわ。ならば私も職務に忠実にならないと。地球人女の服の着方を教えてあげます」

「すまん、頼む」

「黒色の人からすまんと言われたのは初めてですよ」

アルフォンはマリアから服の着方と、簡単な化粧の方法を教わった。

その間、世間話が行われた。

アルフォンは取っつきやすいと思われたからだろう。

「アルフォンさんは、元々男なんですか？ 女なんですか？」

「あまり意識したことはない」

「意識したことはない？ 銭湯に行くときに困るでしょう？ 男が女湯に入ったら騒動よ」

「銭湯とはなんだ？」

「えーと、集団で入るお風呂よ」

「身体を洗う場所か？」

「ええ」

「ならば黒色にもあるぞ。身体の共同洗淨施設だ」

「まさか混浴なの？」

「セックスのことを言っているのなら、我々はアタッチメントの交換で、男性器も女性器も装備できる」

「あら、地球人と違って便利な身体ね」

「うん。いや、既に過去形だな。今はもう女性になってしまった」

「それでこの身体になる前は男だったの？ 女だったの？」

「性器は外していたからニュートラルかな」

「ニュートラル？」

「まあ、大人になる途中で誰でもセックスに夢中になって、自分は男で生きるか女で生きるかを悩んで両方試してみる時期がある。自分にもあった。しかし、一度憑きものが落ちると、急につまらなくなってしまうったな」

「分かるような分からないような話ねえ。でもセックスしないと子孫が残せないでしょ？」

「子孫は工場に依頼して製造するからセックスは関係ない」

「あらまあ。ずいぶんと進んだ社会ね。お母さんはお腹を痛めないの？」

「そうだ。そもそも私の両親は両方とも男で、もしも生身の身体なら子供は作れなかっただろう」

「ホモの夫婦ってこと？」

「ホモ？ ホモとは何だ？」

「男性の同性愛者」

「ああ。調査した資料にあった。同性愛者の問題というものが地球にはあるそうだ。しかし、我々には無い」

「そりゃ無いでしょうよ。赤ちゃんを工場で作っちゃう人たちならね」

「そうだな。私もそう思う」

「でも、セックスって気持ちがいいでしょ？ 若い内からセックス抜きの生活なんてできるの？」

「セックス離れが起きる年代があるのは、快樂ユニットに法定リミッターが入っていて、本当の快感を得られないからだと言われているよ。しかし、生身の身体にはそんなリミッターはない。もう一度セックスを試してみる時かも知れないな」

「ならば避妊だけは気をつけなさいよ」

「なぜだ。私は出産も経験してみたいのだ」

「言いたいことは分かります。いえ、分かるような気がします。でもね、誰の子供でも良いって話は無いでしょう?」

「どういう意味だ? 私が母親になるのでは無いのか?」

「その通り。でも父親次第で産まれてくる子供は違ってくるのよ。だから、百歩譲ってあなたの妊娠願望を認めてあげるけど、せめて相手を選びなさい」

「もしや、それが性別のある世界の女から女へのアドバイスか?」

「そういうことになるわね?」

「1つ質問したい。出産の経験はあるか?」

「あるわよ。一男一女をこれでも産んで育てたのよ」

「会ってみたい」

「残念。息子はガミラス戦役で死んだわ」

「娘の方はどうなんだ?」

「田舎暮らしだから、こんな街中には滅多に来ないわ。山の中の全寮制の学校に通っているの」

「残念だ」

「黒色の人って、みんな若い女にばかりなりたがって、娘も危ないと思ったのよ。この仕事に就くときに娘だけは身体を取られないという免除許可証を貰えたから良かったわ」

確かに言われてみれば、このマリアの娘が愚鈍な黒色人に身体を奪われ、馬鹿丸出しの愚行をして回るのは見たくはない。

「そうそう。避妊をするなら、ファミリーセーフという薬がお勧めだけど。もしかして、黒色にはいいお薬があるの?」

「いや」とアルフォンは首を横に振った。「快樂のためのアタッチメントに妊娠能力は元々無いのだ。そういう目的の薬も開発されていない」

「なら薬局によってファミリーセーフを買って行きなさい。毎朝1錠で避妊できるから」

「わかった。ファミリーセーフだな」

「異星人の身体なら分からないけれど、この身体は地球人だから良く効

くでしょう」

「たぶんな。ああ、そうだ。思いだしたぞ」

「何を？」

「産まれたとき、自分は男だった」

「あら。アタッチメントで性器を取り替えられるのでしょうか？」

「セックスに使う道具の話だ。製造されるときは当然両親に遺伝子をミックスして子供の遺伝子が作られる。そして、遺伝子には性別情報が含まれる。私は生まれたときは男だった」

「産まれるって工場で製造されたってこと？」

「もちろんだ」

「じゃあ、男なのに女の身体を求めたわけ？」

「どこかおかしいか？ みんな同じだと思うが」

「そうね。たぶんあなた方はみんな同じ。でもね。地球では性転換願望を持った変態と言われちゃうの」

「変人と言われたことはあるが、変態は初めてだ」

「ごめんなさい。気分を悪くした？」

「いや。むしろ新鮮だ」

「地球にはね。女になりたいくて無理矢理女の服を着たり、女のように振る舞う変態さんがいるのよ。でも、いくら身体を手術したって、出産ができる女にはなれないわ。でも、実際に女になっちゃったあなたたちはきつと恨まれると思うわ。あるいは、もしかしてお金を積んでその装置を使わせてくれと言ってくるかも知れないわね」

アルフォンは少々意外な言葉を聞いた気がした。

他人の身体を乗っ取るなど、地球人から見れば悪いことに違いない。そう思っていた。なのに、この機械を使いたがる地球人もいるだと？

黒色に協力するこの女といい、地球人についての認識を改める必要があるかも知れない。いや、それ以前にこの身体を持ち主と会話もしないで意識を乗っ取ってしまったことが悔やまれた。話をしたら、この女も意外なことを言い出したかも知れない。まあ、記憶キューブがある以上、仮想空

間で対話する方法はある。話をすることは不可能ではない。それどころか、もし身体を奪うことが間違いであっても、身体を返すことも可能なのだ。この装置のオーバーヒートさえ直れば。

「しかし残念だな。おそらく、この装置を地球人が使える日は来るまい」「なぜ?」

「あの長い行列を見ろ」

「黒色の人のニーズすら満足できないのに地球人が使えるわけが無いわよね」

「それに乗り移るべき身体が調達できない」

「それもそうね。強引に身体を調達したらそれは殺人と同じ。地球人同士ではできないわ」

「そうだろう。こんなことはデリカシーのない侵略者にしかできない」

「あら。自分で自分を侵略者というの?」

「皮肉が過ぎたかね」

「そうだ。良いことを思い付いた。男になりたい女と女になりたい男が身体を交換すればいいのよ。これで対等だわ。誰も損をしない取引よ」

「君はどうなんだ。君自身は可能なら身体を取り替えてみたいと思うか?」

「そうね。1日ぐらいなら男で過ごすのも悪くないわね」

「1日ぐらいか」

「男って大ざっぱでがさつだから、たぶん1日ぐらいで飽きるわ」

「では、それほど歓迎はしていないのだな」

「そうね。ああそうそう。もしも、若い身体になれるなら興味はあるわね」

「若いことは良いことか?」

「それはいいわよ。若いというだけでたいていの難題は解決するわ」

「しかし実行は難しそうだ」

「そうね。もしも身体を交換しても、対等とは言えないわ。若返る方は良いけれど、いきなり歳を取った身体を押しつけられる方は可哀想」

その頃にはどう身につけていたのかも分からない服をきちんと着込み、

化粧もそれなりに整っていた。つまり、もう私は元の凛々しい地球人女の姿に戻っていた。

「これで完璧ね」

「いや。まだ足りない」とアルフォンは、通りかかった係員を呼んだ。

「アレが見当たらないぞ」

「アレとは？」

「地球人の身体を得た黒色人が純粋地球人と外見上の区別が付かなくなるのは好ましくないとして取り決めた符牒アクセサリだ」

「失礼しました、今取ってきます」

係員が走り去ったが、すぐに係員は他の部屋から声が掛かって動けなくなった。

「忙しそうだな」とアルフォンは考えた。「機械がオーバーヒートで止まった関係で、係員も手が足りないようだ」

「そうかもしれないわね」とマリアはうなずいた。

「彼には悪いことをした。こう言うときに文句を付けるだけで付けて自分は何もしないのは、悪い態度だ。自分で取りに行こう」

「羨ましいわ」

「なぜだ？」

「子供にもそういう態度を取る大人になって欲しかったわ」

どうやら地球にも、ふんぞりかえってばかりで他人を当てにする人間が多いようだ。

アルフォンは、倉庫の場所を聞くと自分でそれを取りに行った。

しかし、妙なことに気付いた。

地球人達がみなアルフォンを見ているのだ。

思い切ってアルフォンは質問してみた。

「私の振る舞いに何かおかしいところがあるなら教えてくれ。今日からこの身体に慣れねばならないのでね」

そう言われた地球人は狼狽したようだった。

「おまえは森雪じゃないのか!」

アルフォンはピンと来た。地球人は、救国の英雄の1人である森雪が重核子爆弾内を闊歩していることに驚いていたのだ。そして、彼らはその状況になんらかの合理的な理由を求め、アルフォンの言葉は彼らの希望を打ち砕いた。森雪の身体は占領者に奪取されてしまったのだ。

アルフォンは肩をすくめ、倉庫で黒色星団帝国のマーク入りブローチを受け取った。

もう少しマリアと話したいと思ったが、既にマリアは別の人物につきっきりで世話を始めていた。割りこむのも悪いので、アルフォンはそのまま駐車場の自分の車に向かった。

後部座席に鞆とキューブを置くと、アルフォンは車に乗り込んだ。

運転主席に座ると妙にステアリングが遠かった。そうか、身体が少し小さくなったからか。アルフォンはシートを調整した。

そして、走行を開始した。

そうすると、今度は新しい自分の身体が気になってきた。

地球の有人主力艦の所在はほとんど書かれていないのに、セックスに関する情報だけがやたら充実した地球の報告書に、1人で行う自流行為についての記述があったことを思いだした。

それならば、1人で移動中の今でも試することができる。

方法は簡単だ。

鋭敏な部分を指でこするだけだ。

アルフォンは車の運転をオートに切り替えるとシートを倒してスカートの中に指を伸ばしてみた。

パンティの中に、鋭敏な箇所はあった。

アルフォンがそこを強く触ると、衝撃が全身を走った。

今度やゆっくりとソフトに触った。

なんて大きく深い快感なのだ。

機械の身体の百倍は素晴らしい。

アルフォンは、下着を濡らしつつ性感帯の刺激を続けた。

やがて大きなうねりがアルフォンを襲った。

声を上げながらアルフォンは身体をのけぞらせた。

これが、生身の身体で「行く」ということか。

しばらくは身動きできないほどの衝撃だった。

身体は汗ばんでいた。

そのとき、自転車電話の呼び出し音が鳴った。

「アルフォンです」と訓練された反射でアルフォンは電話を取った。

『おい、声がいつもと違うぞ』と電話の主が言ったが、相手の声もアルフォンには分からなかった。

「お互い、既に生身の身体を手に入れたようですね」

『ああ、そうか。事前に打ち合わせた符牒を言え』

「聖総統万歳 1919」

『勝利の栄光を聖総統に 0069』

「認証した」

『ジオリンだ。これからはこの声でジオリンだと分かってくれ』

「分かった」

『それから、こちらも認証した。君はアルフォン本人だ』

「認証を感謝する」

しかし、この符牒は馬鹿げているとアルフォンは思った。一見聖総統を讃えているように見えるが、1919や69とは、要するに地球で使用されているエロワードの符牒としての番号だ。戦艦の所在について言及していない報告書が詳細に報告した地球の性文化の一部として報告されていたものだ。

聖総統スカルダートに面と向かって逆らう者はいないが、やはり外様の王であるスカルダートへの不満が水面下で高まっている。もしもヤマトがデザリウムを波動砲で撃つ時、艦隊は一切それを妨害しないのではないかとすら思えた。あるいはポーズだけの軽い手加減した攻撃だけ加えて、ヤマトの行動をあえて阻止しないのではないかとすら思えた。

「それで用事はなんだ、ジオリン？」

『カザンの馬鹿がやりやがった』

「地球占領軍総司令長官様だろ？ 馬鹿呼ばわりしてはまずい。それに、部下と違って地球の艦艇特にヤマトの所在を掴む必要があるという進言に耳を貸してくれた人だろう。占領軍ではかなりマシな部類に入るのではないか？」

『自分もそう思っていたよ』

「というと？」

『いきなり地球防衛軍の首脳を呼びつけて高圧的にヤマトの所在を聞き出そうとした』

「なんだと？」

『相手を心理的に弱らせて自白に持ち込むとか、そういう尋問のイロハも知らないに見える。当然相手は強行に突っぱねて、切れたカザンは処刑を言い渡した』

「おいおい。穏やかじゃないぞ。いきなりの処刑とは」

『カザンにはその権限がある。まだ占領非常事態は解除されていない以上、長官一存で全ての地球人の命は奪える』

「それはそうだが、既に地球の占領はほぼ完了しているんだ。もう強権を振りかざす状況ではないだろう」

『ほぼ占領というのがくせ者だ。まだ抵抗している奴等がいくらでもいる。地球の主力艦の所在はほとんど掴めないまま。カザンは占領が完了したなどとは思っていないさ』

「しかし、それが緊急の連絡になる理由はなんだい？」

『一緒に処刑されることになった地球防衛軍の地上部隊の総指揮官が自爆しやがったのだ。それで、地球防衛軍司令長官にはまんまと逃げられた』

「ちょっと待て。自爆だと？ 爆発物の所持はチェック済みだろう？」

『その総司令官というのはな、うかつなことにコダイマモルだったのだよ』

「コダイマモル？」

『報告書に書いてある。ガミラス戦役で重傷を負い死亡。しかし、イスカンドロイドとして蘇った男だ。一般には奇跡的に生き延びたことになっ

ているがな。実際はイスカンドロイドだ』

「思いました。イスカンドルが自爆したときに脱出したイスカンドロイドが推定で2体あったはずだ。その1体ということか?」

『そうだ。内部機構を暴走させて自爆したのか、もともと自爆用の爆薬を仕込んでいたのかは分からない。しかし、イスカンドロイドである以上、我々のチェックをすり抜けてもおかしくない。何しろ、レントゲンを撮っても生身の身体に見える偽装が完備されているぐらいで、他の偽装も完璧だ』

「イスカンドルか。爆発して無くなったので、存在を失念していた」

『ともかくそういうことだ。緊急作戦会議が開かれる。アルフォン、君も来てくれ』

「了解した」

電話は切れた。

到着までに、もう1回自決行為をこの身体に試す時間はありそうだった。

アルフォンは、マリアに教えられた通りに衣服を直して、化粧も直し、快樂にふけていたことなどおくびにも出さないようにして情報部のオフィスに入った。旧式宇宙艦を改造したカーゴシップの中をオフィスとして使っているもので、宇宙から地球に降下させたものだ。さすがに、敵地のビルを接收して本部には使えなかった。どこに目耳があるか分からないのだ。

オフィスに入ったアルフォンは、漠然とした期待が裏切られるのを感じた。

そこにいる全員が、若い女性の肉体になっていたからだ。全員が胸に暗黒星団帝国の紋章入りブローチを付けている。

男の身体を選んだ者は1人もいない。

これでは、車の中で同僚に身体をいじってもらうこともできやしない。

しかし、取り澄ました顔でアルフォンは「アルフォン、到着しました」と敬礼して自分の席についた。

「取りあえずすぐ来られるのはこれで全部です」と赤毛美女になっていたジオリンが報告した。

「では始めよう」ブロンド巻き毛の豊満な美女になっていた上司のグロイザーが宣言した。「緊急の用件が2つある」

「2つですか？ 地球防衛軍司令長官に逃げられた話とは別に何か用件が？」

「そうだ」とグロイザーはうなずいた。「1つめの用件はそれだ。地球に持ち込んだ意識を転送する装置が動かなくなって復旧の見通しも立っていない。当初はただの使い過ぎ、ただのオーバーヒートと思われたが冷却しても動かない。部品が故障した可能性も示唆されているが、まだ詳細は不明だ。もしそうなら修復できるかどうかは五分五分だという」

「しかし、それは技術部の問題では？」

「修理に関しては技術部の問題だ。しかし、影響は我々にもある」

「というと？」

「情報部特権で先行して生身の肉体を手に入れた我々はやっかまれているわけだ。残りの連中は生身の身体が欲しくても機械が動かない以上身体に意識を転送できない」

「長い行列を待ってそれでは我々が殺されますね」

「そうだ。だから、目立つ真似はするな。できるだけ外も出歩くな。占領軍の一般兵士を刺激して暴発させるような挑発はしてはならん。どうしても外を出歩くなら、ブローチは外して地球人女性を偽装しろ」

「部長!」と1人が手を上げた。「占領軍の兵士には、面白がって狙撃したりレイプしたりする不心得者が少なくないという情報があります。地球人女性を偽装すると、狙われる可能性があります……」

「残念ながら……」グロイザーは言った。「そこは軍紀を引き締める好機と思うしかない。不心得者をいぶりだせる」

「最悪、狙撃されたら死にます」

「遺族には不自由をさせないから安心しろ」

一同は黙りこんだ。

これは大変なことになった。

「ただし、生身の身体を得た者の外勤は最小限とする。今ここにいない連中は、生身の身体をまだ得ていない者達だ。できるだけ外勤は彼らに任せるように配慮する」

少しだけホッとしたため息が出た。

「ではもう1つの用件だ」とグロイザーは話を変えた。「トードーが脱走した」

「誰ですか?」誰かが質問した。

「地球防衛軍司令長官だ」

「あいつがトードー……」

「話を手短かにまとめる。イスカンドロイドの自爆に紛れて奴は逃げ出した。3つ先のビルまでは足取りが掴めているが、その先がいくら調べても分からない。おそらく手引きした仲間がいる。あのまま地下に潜伏したと思って間違いない」

「それで?」

「ということは、抵抗組織があると思って間違いない。どこかに中枢拠点があるはずだ。そこにトードーもいるはずだ。我々はそれを探さねばならない」

「雲を掴むような話ですね」と誰かが言った。

「そうだ」

そこでアルフォンは気付いた。「この身体はトードーの秘書のものです。秘書の意識データはこのキューブに保管してきました。場所は聞き出せるかもしれません」

「見せてくれ」と技術担当のボテクノイジャーがキューブを受け取って装置にセットした。「ダメだな、記憶はロックされている。本人が自発的にロック解除しない限り記憶を閲覧できない」

「まあ、地球防衛軍司令長官の秘書ともなればその程度の防諜対策は当然か」とアルフォンは考え込んだ。「無理矢理取り出すと他の記憶も壊れるな」

「いいじゃないか、トードーの所在さえ分かれば」

「いや。地球の主力艦の所在も知りたいのだ」とアルフォンは説明した。
「他にも有益な情報を山ほど知っているだろう。トーダーの情報だけの問題ではない」

「そうか」

「だがしかし」とグロイザーが宣言した。「このキューブは重要な手がかりになるぞ」

「提案があります」とアルフォンは手を上げた。「現実と偽って現実そっくりの仮想空間にこの意識を放つのです。そして、仲間との合流を示唆して合流させます。仮想世界で彼女が行く先がおそらくトーダーの居場所です。少なくとも連絡は取るはずです」

「なるほど。自発的に合流させるわけか」

「仮想空間で仮想のトーダーに合流させても現実の我々には痛くも痒くもありません」

「よし。その方向で計画を練ろう」

その時、電話が鳴った。

グロイザーはすぐに受話器を取った。「私だ。グロイザーだ。用事はなんだ?」

そして、グロイザーは真っ青になって、受話器を置いた。

「諸君、良いニュースと悪いニュースが同時に飛び込んできた。どちらから先に聞きたい?」

「では良いニュースから」とアルフォンは言った。

「ヤマトの所在が判明した。小惑星の内部に偽装されたドックがあり、そこに置かれていた。アステロイドベルトに隠されていたのだ」

「ではさっそくカザン長官に連絡して艦隊を派遣して頂きましょう」

「カザン長官は既に艦隊を率いて出撃済みだ」

「ならば安心ですね」

「そうでもない。悪いニュースを説明しよう。重核子爆弾は素通りしたので、小惑星にいた者達は生きている。そして、彼らはヤマトを発進させた」

「地球を奪還しに来るわけですね？」

「いや、外宇宙を目指した」

「地球を見捨てて逃げ出したのですか？」

「そうではない。暗号通信の傍受班からの報告によると、重核子爆弾の起動スイッチは地球とデザリামの双方に存在するという情報が奴等に漏れたらしい」

「ということは……」

「ヤマトの目的はデザリামにあるスイッチの破壊だろう」

「それならば」とアルフォンは記憶キューブを指さした。「彼女にはもう一働きしてもらいましょう」

「どうするのか？」

「仮想世界で重核子爆弾の地球側スイッチを破壊させるのです。すると彼女は必然的にヤマトに連絡を取らねばなりません。それは取らせましょう。仮想空間からの連絡と現実からの連絡は平面のパネルに映った時点で区別できません」

「それで？」

「万一デザリামのスイッチが破壊されても地球のスイッチが残れば、重核子爆弾の脅しとしての機能は失われません。デザリাম側のスイッチを破壊して勝ったと思い込んで意気揚々と帰ってきたヤマトを我々は脅して降伏させることができます」

「しかし、それはヤマトがデザリামに到着出来たらの話だな。そしてスイッチを破壊できたらの話だな」

「あくまで保険ですよ」

「保険か。しかし、その保険、非常に重要という気がするぞ」

そこでアルフォンは分かった。グロイザーが持っている危機感アルフオンの危機感と似通っている。艦隊は聖総統スカルダートを撃つヤマトを本気で攻撃しないかもしれない。そう思っているのだ。

グロイザーは命じた。「ジオリン、シナリオを書け」

「さっきからもう考えています。赤い光弾の名にかけてすぐに書き上げ

ますよ」

ああそうか。ジオリンが赤毛の美女の身体を選んだのは赤い光弾の二つ名に引っかけてのことか。アルフォンはやっと気付いた。

「相手役は自分が志願します」とアルフォンは手を上げた。「この身体の元の持ち主です。この身体を上手く活用するためにも、聞きたい話は多いのです」

「良からう。どのみち派手な外出は出来なのだ。仮想空間で働いてもらおう。

「ありがとうございます」

「では解散だ」

アルフォンは、ジオリンの横に行き質問した。

「どういう感じにまとめる気だ？」

「そうだな。あまりにスムーズだと疑われる」ジオリンは説明した。「重核子爆弾解体の秘密という情報があるでしょう。そして、君はハンサムな技術将校となり、秘書に惚れ込んだことにする。重核子爆弾解体の秘密と引き替えにオレの女になれと迫るわけだ。きっと責任感から、嘘でもアルフォンの女になると誓って情報を聞く。聞いたらそれを伝えるために必ずトードーと連絡を取る。そこで、トードーの潜伏場所が割れるわけだ」

「しかし、自分にモリユキを愛するハンサムなど演じられるかな。どちらかといえば、女性的な性格だし」

「自分と違う性格だから演じられるんじゃないか。似てたら演技と地が混ざって制御できなくなるぞ」

「そんなものかな」

「そんなものだ」

アルフォンはジオリンを残して自分の部屋に戻った。

ふう。

アルフォンはベッドに倒れ込んでため息を付いた。

疲れた……。

今日はいろいろありすぎた。

しかし、まだ終わりにするには早かった。

アルフォンは服を縫いでシャワーを浴びた。

無駄に性行為に関する記述だけ充実した報告書に、地球人はシャワーを使用した自流行為を行うと書いてあったのだ。生身の女性器に、水流を当てて刺激を得るというのだ。アルフォンは、それを試さずには寝られないと思った。

アルフォンは、クセになりそうな快楽に興奮し、3回もシャワーによる自流行為に浸った。それから、やっと泥のように眠り込んだ。

翌朝、アルフォンはモリユキの服をチェックしてけっこう汚れや破れが目立つことに気付いた。あれだけの動乱を駆け抜けたのだ。やむを得まい。

アルフォンは身体のサイズを連絡して、女性用の黒色の制服一式を届けさせた。

制服は色気は無いが機能的ではあった。

それを着て、情報部のオフィスに出頭した。

ジオリンは、メモ리카ードをアルフォンに手渡した。「自信作だ。しっかりやれよ」

「分かった。心しよう」

アルフォンは自分の端末にメモ리카ードを差し込んで中身を読んだ。

さすがジオリンだ。

細やかな配慮が行き届いている。

技術将校が発見した負傷女性を発見して自分の家に連れ帰る。目覚めるときは痛みを感じさせる。世界の不自然さを誤魔化するためでもあるし、現実のリアリティを痛みで感じさせるためでもある。更に、それによって、痛みを配慮するアルフォンの優しさも演出する。その後は、惚れた女への弱みを見せて、逃亡を可能とするゆとりをあえて作って見せる。

しかし、モリユキは逃げないことが前提でシナリオは組んであった。責任感がある優秀な若い人材なら逃げないはずだ。モリユキは、重核子爆弾の秘密を聞き出すまではそこに居残るに違いない。

そして、永遠に自分のものになってくれ、と迫る。モリユキの婚約者は、

既に死んでいるという情報を与えておく。そうすれば、貞操と義務感を天秤に掛けなくて済む。重核子爆弾の秘密と引き替えにモリユキは自分自身を差し出すだろう。そして、モリユキはそれを知るとトードーの所に逃亡するだろう。そこから先はアルフォンの仕事ではない。

問題はこのモリユキの婚約者は、既に死んでいるという情報だ。

何しろ、そのような情報は実際には存在しないのだ。

情報部の調査では、モリユキの婚約者であるコダイは、連絡艇で小惑星まで飛んだ一団に含まれていて、そのままヤマトに乗り込んでデザリウムに向かったと思われるからだ。

しかし、このシナリオは巧妙だった。

あの連絡艇に生命反応は無かった……。だから生きている者は乗っていないに違いない。そのような論法で説得を行うように書かれていた。あの連絡艇に生命反応は無かった……というのは事実だ。しかし、そもそも生命反応とは何だ？ いったい何を使用して計測した場合なのか？

近距離で宇宙船の生存者を調べるセンサーの生命反応は、宇宙船内の生きた人間を検出できる。しかし、超長距離で探査を行うセンサーの場合、対放射線防御を施した宇宙船の外壁を貫通して内部の人間を感知するだけの力はない。だから、惑星上に生命があるのかの探査には使用できるが、個々の宇宙船が無人か有人かを判定するのには使えない。

しかし、ものは言いようだ。

そもそも、モリユキは、黒色のセンサーの精度など知ってはいないだろう。

巧妙に事実を交えた嘘でモリユキを騙す。

この身体の元の持ち主の心だ。

アルフォンの心も痛む。

心は痛むがやむを得ない。これも仕事なのだ。

それにパルチザンを放置しておけば人が死ぬ。

そのとき、ジオリンが近寄ってきて耳打ちした。

「仕事の後で付き合わないか？」

「なんだ?」

「実は、この身体の元の持ち主の部屋で面白いものを発見してね」 ジオリンは囁いた。

「その身体の元の持ち主の部屋? 調べたのか?」

「所持品の身分証に住所が書いてあったからな。鍵も持っていた。調べるほどのことじゃないよ」

「そうか。それならそうだな」

「1 人暮らしだったようで、部屋に入り込んで調べるのは簡単だったよ」

「それで、面白いものとは?」

「これだよ」

ジオリンはそっと手に持った鞆の中身をアルフォンに見せた。

中には男性器を象った道具が見えた。

「報告書にあったバイブレーターというものだろう? 一人用の自慰の道具と報告書にあったと思うが」

「よく見てくれ」

見ると両端に男性器を象った先端が付いていた。

「なんだこれは?」

「な、面白いだろう?」

「理解できないな。単に自慰に使うなら片方だけで十分だろう」

「そう思って自分も調べたよ」

「それで?」

「女性 2 名が両端から挿入して一緒に楽しむ道具だと分かった」

「ちょっと待て。女性 2 名?」

「そうさ。地球人は簡単に身体を交換できないから、同性で愛し合ってしまうと工夫が必要とされたんだ」

「地球人とは、どこまで快楽に貪欲な人種なのだ」

「どうだ。この道具を使ってみたいという好奇心が沸いてこないか?」

「分かった。1 人では使えないから私に声を掛けた訳か。しかしなぜ私に?」

「理由を言わないとダメかい？」

「一応は聞きたいね」

「君が情報部最年少将校でうるさいことを言わないで済ませてくれそうだからさ」

アルフォンはやっと納得した。

元の身体の一部を物色する行為は禁止されていない。しかし、大多数の黒色人が身体の入手を待っている段階では自粛すべき行為という通達が出ていた。要するに地球人から見れば泥棒行為であり、治安の悪化は避けたいからだ。もしも、数十億の地球人が総決起すると、たとえ鎮圧できてもかなりの黒色人に被害が出る。

だから、物色の事実を格上の同僚や上司が知れば小言の1つも言うだろう。

「いいよ。僕は何も文句を言わないよ」

アルフォンは、仮想空間ボックス通称コフィンに入った。

頭に電極を付けると、係員にオーケーのサインを出した。

アルフォンはそのまま仮想空間に入った。

既にモリユキの身体ではない。

占領軍の技術将校アルフォン少尉だ。仮想空間だから少しは理想化できる。だから、元の身体のアフォンよりも、ちょっとハンサムだ。

アルフォンが寝室のドアを開くと、負傷したモリユキがうなされていた。

自分のものにしたはずの身体がそこにあると、とても不思議な気持ちだった。

しかし、これは仮想空間。

モリユキの身体は既にアルフォンのものだ。

アルフォンは優しく苦痛に耐えるモリユキをいたわった。

意識を取り戻したモリユキは、聡明な女性だった。

一定の警戒はけして解かず、それでいて状況を把握するために積極的に会話に乗ってきた。

時々、シナリオの想定を超えた質問をしてきて、アルフォンはアドリブで応答を余儀なくされた。そのうちに、アルフォンはシナリオを捨てて地のままで会話することにした。

「君のことがもっと知りたい」アルフォンは言った。それは本心だった。どのような人物から身体を奪ってしまったのか。それを知りたかったのだ。

「重要機密は喋れません」

「それがいい」とアルフォンは言った。「私が知りたいのは、地球防衛軍のことではなく、君のことだ」

「それは……」

モリユキは自分の生い立ちを少しずつ話し始めた。

モリユキは異能の少女として幼少の時から注目を集めていたらしい。様々な分野で成果を出し、天才少女とマスコミにもてはやされたこともあるらしい。

しかし、2190年代のガミラス戦役で状況は変化した。

戦地に行くには若すぎるモリユキは後方の業務に志願したが、人手が払底していくにつれ、モリユキは複数の部門を掛け持ちして手助けするようになった。

コンピュータを扱う部門で人手が足りないと応援にも行った。

配給の管理部門で人手が不足すると、配給切符も作成した。

看護婦不足でシフトに空きが出来ると、病院に手助けに行った。

どこでも、即戦力となった異能のモリユキは歓迎され、その美貌と相まって、天は二物も三物も与えたと噂された。

病院では、「病院一の大美女」と呼ばれることもあった。

そして、ガミラス戦役の勝敗を決定づけた宇宙戦艦ヤマトの航海に、当然のようにモリユキは指名された。もしも、1年でも早ければ指名されることはなかっただろう。17歳は宇宙船で勤務させるには若すぎたのだ。しかし、人材が払底していた地球では、ほとんどの乗組員を18歳前後の若者で構成せざるを得ず、18歳になっていたモリユキはけして若すぎることはなかった。

そして、モリユキは生活班の班長に指名されたが、多芸なモリユキの活動はその範囲に制限されることはなかった。艦医の助手を務め、艦橋でレーダーを監視し、艦内にコーヒーを淹れて配ることも怠らなかった。その上で、トードーからの密命である「艦内のお色気担当」という職務までこなした。何しろ、ひそかに女性乗組員に偽装して乗り込ませた「動くダッチワイフ部隊」を除けば、女性乗組員はモリユキだけだったのだ。

そして、「動くダッチワイフ部隊」は航海を初めて早々に全機がスクラップとなり、航海のほとんどはモリユキがたった1人の女性として勤務せざるを得なくなった。

その航海の心の支えになったのは、同じヤマトの戦闘班長であるコダイという男だった。コダイは戦闘班長であり、様々な任務をこなすモリユキの護衛に付くことも多かった。その関係で二人は接近したが、地球を救う大航海という使命の重さから告白はためらわれていた。しかし告白はせずともモリユキの心の支えになったのだ。

しかし、アルフォンは別のことを考えていた

モリユキの語るコダイとは、自爆したコダイマモルの弟のコダイススムのことだ。コダイマモルの自爆で緊急招集されたことを思えば、奇妙な因縁だった。そして、アルフォンはコダイススムに興味を持った。コダイマモルは自爆してしまった以上、既に会うことは叶わない。しかし、宇宙戦艦ヤマト艦長代理としてかつて地球を救った男、コダイススムには興味があった。いったい、戦艦を指揮して惑星の命運を背負って戦い、そして勝つことはどんな気分だろうか。しかも、話からすればアルフォンと年齢は大差ない。アルフォンは情報部でいちばん若い将校であり、言わば将校としては最も下っ端だ。しかし、コダイススムはそうではない。巨大戦艦のトップとしての権限を掌握して行使した実績があるのだ。

ようやくアルフォンは気付いた。

異能のモリユキと、若くしてそれだけの権限を掌握したコダイススムは結ばれるべくして結ばれたのだ。

そして、モリユキの相手役として、アルフォンは格負けしていた。

しかし、アルフォンは別のことに気付いた。

実は情報部としては自爆したコダイマモルの情報も収集しているところだ。

「ユキ、君はススムの兄のことはどれぐらい知っているかね?」

「守さん……。いえ、それほどは。イスカンダルで少し会っただけです」

「どんな話をしたのだね?」

「いえ。ほとんど話は……」

「じゃあ何を知っているのだね?」

「スターシャさんが守さんを愛していると気付いて、愛を成就するように促しました。ですから、スターシャさんとは少し話しましたが、守さんとはそれほど……」

「愛を成就?」

「ええ」

「しかし、イスカンドロイドだぞ」

「なんですかそれは?」

「まさか、ユキ。君はスターシャもコダイマモルも人間だと思っていたのか?」

「えっ」モリユキの顔が青くなった。「でも確かに2人には子供が……」

「子供か。調べは付いている。赤ん坊型のイスカンドロイドもイスカンダルには確認されている。コダイマモルの遺伝情報とスターシャの遺伝情報を合成してスターシャが体内で製造したイスカンドロイドだ」

「それはどういう意味ですか?」

「イスカンダル人は全員が死に絶えていて、墓守に残したロボットが動作不良を起こし、イスカンダルの女王を僭称してスターシャとなっていたのだ」

「嘘……」

「コダイマモルの方は、既に死んでいて遺体を研究のために輸送中、事故が起きてイスカンダルに流れ着いた。それをスターシャが回収して、イスカンドロイドしてコダイマモルをい復元したようだ」

「守さんは死んでいたの?」

「そうだ」

「スターシャだけはイスカンダリウムを戦争目的に絶対に使わせないと
いう最終命令を絶対的に堅持していた。だから、ゴルバに対してイスカン
ダルを自爆させたのだ。しかし、その命令プログラムを持たないコダイマ
モルと赤ん坊は脱出させた。それは狂った AI に芽生えた愛情の一種なの
だろう」

「嘘……」

「コダイマモルについても、ある程度の調べは付いている」

「もう聞きたくない」

そこでアルフォンは意地悪な欲求を感じた。モリユキを困らせたい。だ
から話を続けた。

「いいか良く聞け。スターシャは、自分を守護して補佐するナイト役が
欲しかった。だから、コダイマモルをイスカンドロイドとして復元すると
きに、そのようなプログラムを与えた。そのプログラムは、スターシャが
死んだ時点で機能停止したかに見えた。しかし違った。トードーを守るた
めに、コダイマモルは自爆したのだ」

モリユキは息を飲んだ。

それからゆっくりと質問した。

「藤堂長官は?」

「まんまと逃げられた。地下に潜伏して居場所も分からない」

「そうですか……」

アルフォンの勘が告げた。やはりモリユキは藤堂がこういうときにどこ
に潜伏するか場所を知っている。

しかし、今のアルフォンはむしろススムの方が気になった。

「ところで、コダイススムの写真はいつも持ち歩いているのかね」

「ええ」とモリユキは鞆から 1 枚の写真を出した。

にやけてモリユキの肩に手を掛けようとして、モリユキにそのなれなれ
しい手をはね除けられている写真だ。

「ガミラス戦役の時、大マゼラン付近を航行中に撮った写真です」
ススムの隣にいる女がアルフォンなら、どんなに良いことか。アルフォンなら手を払ったりしない。ススムを心底受け入れるのに……。

そしてアルフォンは気付いた。

この写真に写っている身体こそ、今はアルフォンの身体なのだ。

ならば、アルフォンがコダイススムの恋人になれる日が来てもおかしくないのではないか？

いや別人の心を持った身体を、ススムは受け入れないかも知れない。

それどこか、愛する女から身体を奪った男として糾弾されかねない。

アルフォンはモリユキに気付かれないようにため息を付いた。

仮想空間から出ると、アルフォンはモリユキの持ち物をチェックした。

あれと同じ写真をモリユキはリアルでも所持していた。

その写真をアルフォンは大切に保管した。

その夜。

女性用の道具を使用したジオリンとの快樂ゲームは、意外なことにアルフォンにも楽しかった。道具を使用して深い快樂をむさぼるのは、ジオリンにとってもアルフォンにとっても初めてだったのだ。

明け方まで断続的に何回も2人で道具を楽しみ、明け方になってようやく2人で寝た。手を繋いだまま熟睡した。

第二章 混乱

翌朝、遅刻しないように慌ててオフィスに出ると、既に騒然としていた。

「やばいぞ、ジオリン、アルフォン」と同僚が言った。

「何があった」

「大中間補給基地が撃破された」

「なんだって？」

「我々は捕球物資の大半を失った。本星から輸送するにしても、補給線

は細い」

「なぜそんなことが」

「ヤマトの艦載機隊の奇襲だ。防衛部隊は間に合わなかった」

「なんてことだ」

「しかも、艦隊はほとんどヤマト追撃のために地球を出払っている。重核子爆弾の意識転送装置は未だに故障中で復旧の目処は立たず。修理に使えるかもしれないパーツは大中間補給基地ごと消えた」

「それはやばくないか？」

「そうだ。今ここでアンドロメダ級の一隻でも出てくれば我々は勝てないかもしれない。重核子爆弾を使うしかない」

「アンドロメダ級か。ヤマト以上のモンスターだな。所在不明のアンドロメダ級はまだ何隻残っているのだ？」

「アンドロメダ級は 12 隻建造されたことが分かっているが、白色彗星戦役で一隻損失している。地球は現在 11 隻のアンドロメダ級をモスボールしているはずなのだが……」

「だが？」

「実は所在を確認できたのはたった三隻に過ぎない」

「まさか」

「そうさ。あのデカ物があと八隻も隠れているのだ」

「ヤマトは小惑星に隠してあったのだろうか？ 他のアンドロメダ級も同じではないか？」

「小惑星がいくつあると思っている。既に探索命令は出ているが、機材が不足して十分に探索を実行できていない」

「ヤマト追撃のために機材を取られたか」

「そうだ。あれは痛い」

「そうか」

「おっと早まるな。実はヤマトの他に頭痛の種がある」

「なんだ？」

「アンドロメダ級の 12 番艦の A12 だ。あれはアンドロメダ級と言って

も、実は新型のテストベッドにされていて、新装備がいろいろ追加されているらしい。しかし、その装備の詳細が掴めないのだ。所在不明というだけではなくね」

「まさか。A12 もゴルバの装甲を貫ける兵装を持っていると?」

「そうだと証明されたわけではない。しかし、可能性としては無視できない」

「不明確なのはやっかいですね」

「そうだ。疑心暗鬼を産む」

そこにグロイザー部長が来て宣言した。

「話は既に聞いていると思うが、我々の立場は苦しい。できるだけ地球人に無用の挑発はしないように。それと、同胞にもだ」

「なぜ同胞もなのですか?」誰かが質問した。もっともな質問だとアルフォンは思った。なぜ味方を警戒する必要がある。

「みんな、生身の身体が報酬として得られると思うから、危険な任務に志願してきたのだ。しかし、現実には生身の身体に移動できる装置は稼働していない。期待が裏切られた状態なのだ」

「カザン長官はどうする気なのでしょう?」とアルフォンは質問した。

「カザン長官は、ヤマトを追撃中だ。今は旗艦ガリアデス上にはいるはずだ」

アルフォンは、頭痛の種がもう 1 つあると分かった。占領軍のトップまで追撃に夢中で地球を離れている。トップ不在の占領軍は意外と脆いかも知れない。

「ただし」とグロイザー部長は言った。「君たちにばかり無理をさせる気は無い。君たちのために慰安パーティーを開くことにした。費用は部隊の予算から出る」

「慰安パーティーですか?」と誰かが質問した。「上司の顔色を伺いながら酒を飲むパーティーじゃ、慰安になりませんよ」

「安心しろ」とグロイザー部長はニヤリと笑った。「酒を飲むためのパーティーなど地球まで来てわざわざ開かない」

「ではいったい……」

「君たちの大多数は、情報部特権で既に生身の身体になっている。私もだ。しかし、自粛ムードが漂っていて、好き勝手に快樂を楽しむ状況でも無い。そもそも、みんな女になってしまい、部内でカップルも作れない。だから、信賴できる地球の男達を呼んで、乱交パーティーを開こうと思う。好きな男を選んで自分の身体の性能を思う存分確認するといい。ただし、私と君たちだけの秘密だ」

部内に歓声が沸いた。

せつかく手に入れた生身の身体を十分に試せないストレスが部内にあったのは事実だ。しかも、挑発するなという制約から街に男あさりに出ることもできない。

これは素晴らしい好機だった。

その夜、グロイザー部長が借り切った孤島の海辺の別荘に出向いたのは結局、生身の女の身体を得た 17 人だった。全員がグロイザー部長の顔で回してもらった VTOL 輸送機に乗った。妊娠というものに興味が強い数名を除いて全員が、ファミリーセーフを服用しており、行きずりの男を相手に快樂行為にふける意欲は満々だった。

17 人は、全員が水着姿だった。

理由はある。

黒色人にも地球人にも見られないようにこっそりパーティーをやるなら孤島を選ばざるを得ず、当然海辺のロケーションになるが、水着ならそれに似合うこと。

まだ地球人の衣服になれないメンバーもいるが、面積も小さくそれほど複雑ではない水着は着やすかったこと。

露出度が高いので、男を誘うには好都合と考えた者も多かったこと。

接收したショッピングモールに水着専門店があり、意図せずして多くの水着が手に入ったこと。

調査隊が持ち帰った資料は水着グラビアの比率が高く、ぜひ水着を着て

みたいと思ったメンバーも多かったこと。

等々の諸条件が重なった結果だった。

しかし、話はそれほど単純には済まなかった。

誰もが、面積の大きな大人しげな水着には目もくれず、ほとんど紐のような水着や、隠しているのかどうかも分からないような面積に小さいビキニを選んだからだ。要するに、水着グラビアに登場しやすいタイプの水着ばかりだった。

輸送機の中は、既に異様な熱気で盛り上がっていた。待ちきれない部員は、機内から既に互いの身体を触り合っているほどだった。

眼下に島が見えてきた。栈橋にはやや大きな船が着けられている。これに乗って、相手の男達も来ているのだろう。

しかし、輸送機がビーチに着地し、出迎えた全員で輸送機を降りると戸惑わざるを得なかった。待っていた地球人は、ざっと百人以上の男。しかし、普通の雰囲気ではない。人の生き死にすら金額に変える者達。非合法の活動に手を染める者達。そして、それを覆い隠す上品さも欠いた人たちだ。

匂いで分かった。

彼らは同族だ。

ただ、我々は国家をバックにし、彼らは国家に敵対していた。

それだけの違いだろう。

「確認しますがね、グロイザーさん」と男達のリーダーが言った。「その女の子達を、涙が出るまでひいひいとよがり狂わせるためのパーティー。それで間違ってますよね?」

「ああ、その通りだ」とグロイザー部長は前に出てうなずいた。「しかし、1つだけ訂正がある」

「なんだい。急に怖くなって逃げ出したくなったのかい?」

「いや。私の後にいる部員だけが対象のような言い方だが、私も例外にしないで欲しい」とグロイザー部長は、自分の豊満な胸を掴んで揺すってみせた。

「まあ、なんだな」と男達のリーダーは頭をかいた。「あんたらには儲けさせてもらっているんで、悪いようにする気は無い。痛い時や苦しいときは言ってくればすぐやめる。気持ちいいときは手加減はしないつもりだけどな」

「うちの部員も百戦錬磨だから、大丈夫だ。本当に望まないことをされたら、武器を使わず5秒で相手を殺す技術を持っているから」

相手の顔が引きつった。

「大丈夫だ」とグロイザー部長は微笑んだ。「今日は楽しむために来たのであって、殺しに来たわけではない」

「御同様だ。大きな声では言えないが、うちにも人を殺した経験者もいるし、特に殺しの訓練を受けたプロもいる。しかし、彼らも今日は殺しに来たわけではない。ただし、快感が高まりすぎて死んでしまうことはでは保証できない」

「お互い、腹上死は不問としよう。まだ君たちとの良好な関係を壊したくない」

「同感だ」

「ただし、快感が高まりすぎてショック死するぐらいの気持ちで来て欲しい。萎縮したり手加減は望むところではない」

「後悔しても知らないぞ」相手の男は詰め寄った。

「後悔させてみせろ」グロイザー部長も詰め寄った。

2人はそのまま大胆なディープキスを始めた。

敵対しているのか愛し合っているのか良く分からない対応だ。アルフォンだけでなく、その場にいる男女が全員あっけにとられて見とれた。

2人は唇を離すと、それぞれの配下を振り返って言った。

「何をしている」男が言った。

「全兵装使用自由だ」部長が言った。

「好きな相手を楽しめ」男が言った。

「男は多い。よりどりみどりだぞ」部長が言った。

「殺す気で行け」男が言った。

それから部長は、ほとんど無いに等しい面積の水着を脱いだ。

男は部下 2 人を呼んだ。「ムケ、ヌチャ、ちょっと来い。この女を 3 人がかりで限界までひいひい言わせるぞ」

「あら、3 対 1 じゃないと勝ち目が無いの?」

「まさか」

しかし、状況を傍観していられたのはそこまでだった。

アルフォンは他の仲間のように男達に囲まれ始めた。

何しろ相手の方が人数が多いので、情報部の女達は一人ずつ分断されて男に囲まれていた。

しかし、アルフォンは妙なことに気付いた。

なぜかアルフォンを囲む男だけ数が多いのだ。

アルフォンはいくつもの男の手に身体を触られ、水着を脱がされ、全裸になった。

「なぜみんな私に迫ってくるのだ?」 アルフォンは質問した。「他の仲間もかなりの美人揃いだぞ」

「あんたモリユキだろ」と男の一人が言った。

「残念ながら、私は情報部のアルフォン少尉だ」とアルフォンは答えた。

「この身体はモリユキのものだが、人格は別人だ」

「分かっている」と相手は答えた。「あんたらは地球人の身体を奪う」

「なら、どうして……。嫌われて当然と思うが」

「俺達も身体を売り買いする仕事をしているのでね」と別の男が言った。

「あんらたのやり方にはそれほど大きな不満は持っちゃいない」

「本当に? 掠って勝手に身体を奪ったのだぞ」

「俺達もよくやった。隙のある女を上手く丸め込んで騙して、外国に売り飛ばす……。俺達の日常的なビジネスだ」

「それは犯罪ではないのか?」

「犯罪さ」

そこでアルフォンはやっと納得が行った。

人の道に外れた黒色の占領軍とともに付き合ってくれる相手など、や

はり人の道に外れた犯罪組織なのだ。

だからこそ、モリユキの身体を奪い、現在も仮想空間内で騙し続けているアルフォンが持つ後ろめたさを意識しないで彼らに身体を任せられる。

「しかし、モリユキの身体だけでいいのか？」とアルフォンは言った。

「ああいね」と別の相手が言った。「俺達は、みんな、ガミラス戦役の最後の1年を、モリユキのグラビアにマスをかいてしのいだんだ。身体には思い入れがある。しかし会ったことは無いので、人格には思い入れが無い」

「モリユキのグラビア？ それは初耳だな。そもそも最後の1年、モリユキはイスカンダルへの航海中だろう？ グラビアなど撮れるのか？」

「あったんだよ。海賊版が。撮影は艦内の監視カメラ。ヤマトと地球の通信が切れる前に送られてきた写真を編集して出版されたのだ。航海中にもなぜか1回だけ通信が復帰して、その時にも追加の写真が届いた。何しろ身体の線が丸見えの艦内服だから、脱がなくてもとてもエロい。しかも、艦載ロボットにスカートめくりの機能が仕込んであって、そのシャッターチャンスも逃していない」

「本人は知っていたのか？」

「さあな。隠し撮りなので知らないんじゃないか？」

「そうか。しかし事情は分かった。分かったが、それでも人数は多すぎないか？」

「そうだな。体力の限界を度外視しても、一晩で相手ができるかどうか」

「何か方法は無いのか？」

「ならば、穴という穴を全部使って楽しませてくれ。これで相手は一度に一人ではなくなる」

「意味が良く分からない。変態趣味者は複数の性器を持つ身体を特注で作らせたという話も聞くが、これは生身の身体だ。女性器は1つしか付いていない」

「なら、女にはセックスに使える穴が他にもあることを教えてやる」

アルフォンは、思ってもいなかった身体の部分を利用されたことに驚い

た。なんと地球人は柔軟な発想をするものか。あるいは、快樂への食欲さは想像を超える。既にアルフォンは地球人に圧倒されていた。

しかし、そうやって身体の潜在能力を総動員してすらアルフォンを囲む男達は減らなかった。

「どうしようか。困ったな」

「良いアイデアがある」と男が一人出てきた。「全員でモリユキに白い雪をぶかっけるのはどうだろう。前に人気 AV 女優の相手エキストラを募集して集まりすぎたときに使った手だ」

100%満足な提案ではなかったが、男達は納得した。

「しかし、かなり特殊なプレイだから逃げられてしまうかもしれないぞ」と他の誰かが言った。

「よし、逃げられないように縛ってしまおう」と別の誰かが縄を持ち出してきた。

「おいおい。今回は、対等のお楽しみ会だぞ」と別の誰かが笑った。

しかし、アルフォンは遮った。「構わない。縛ってくれ」

男達の表情が驚きが変わった。

「地球人が行うマニアックなプレイに、縛りが存在することは知っている」とアルフォンは言った。「プレイの範疇に収まる限り、拒否する理由はない」

「我々もプレイの範疇を逸脱する気は無い」と少しは切れそうな男が答えた。「騙して外国に売り飛ばそうなんて考えちゃいない」

しかし、取り囲んでいる男の一人が隣の男を小突いた。たぶん、この男は考えていたのだろう。

更に最初の男が続けた。

「占領軍の人員を商品として売ってしまったら占領軍を敵に回すことになる。占領軍を敵に回して生き延びられると考えるほどうぬぼれちゃいない」

「なら問題は何もない。どうぞ縛ってくれ」

アルフォンは手足を縛られビニールシートに寝かされた。

そして、男達は手でしごいてアルフォンの身体に白い雪を降らせていった。

雪は降り積もり、アルフォンは真っ白になった。

その過程を見ながらアルフォンは思った。意外と楽しい。それからもう1つ気付いた。縛られて身動きしない状況に興奮している自分がいる。

これは何と言ったっけ。

ああそうだ。

地球人が言うマゾ。マゾヒストだ。

アルフォンは、マゾヒストとしての資質を持っていたのだ。

しかし、考えてみれば、アルフォンの父親はサディスト気質であり、母親はマゾヒスト気質だった。だから、男として産まれた母親に『母親役をやれ』と強制し、母は喜んでそれに従った。今どき男の遺伝子二人分で子供を作り出すのは造作も無いことだから、それでアルフォンは生まれたわけだが。ランダムシャッフル装置が、母の遺伝子をより多く選んだらしい。アルフォンは特に母の気質を受け継いでいるようだ。

結局、快樂パーティーは明け方まで続いた。

帰りの輸送機内では、全員が泥のように眠り込んだ。しかし、途中でグブアップした脱落者は一人もいなかった。

疲労のせいで、アルフォンが仮想空間に入るのも遅れた。

モリユキは仮想空間内で、仕事から帰るのが遅れたと理解して受け入れてくれた。

モリユキは逃げるそぶりを見せない。

妻のようにアルフォンの世話を焼いてくれる。料理も作ってくれる。

いろいろな話を語ることも多い。

しかし、アルフォンに惚れてアルフォンの妻になりたがっているのかと言えば、それは怪しかった。何しろ、モリユキには重核子爆弾の秘密というエサをちらつかせているのだ。情報を得るための演技という可能性が高い。

それどころか、間違いなくコダイを忘れていない。一人でいるとき、コダイの写真を一日に何回も見ていることは確認されている。

それでいて、仲むつまじい若夫婦のように振る舞わねばならない。

まるで狐とタヌキの化かし合いだ。

アルフォンは自嘲した。

「白色彗星戦役の時の話を続けてくれ」とアルフォンはうながした。

最近のモリユキはよく喋ってくれる。明らかにアルフォンに心を開いたと印象づけようとしている。おそらく、重核子爆弾の秘密を聞き出すためだ。

しかし、それでも情報が得られるのは有益だった。

植民惑星を使い潰しながら宇宙を放浪する悪党都市帝国ガトランティスを退治してくれた話は、情報部としてもぜひ詳細を知りたい情報だった。

結局、ガトランティスに身を寄せていたデスラーのアドバイスが勝利の鍵だと分かった。そして、デスラーを協力する気にさせたのは、モリユキの献身的に凶弾からコダイとデスラーを守ったからだ。モリユキはそういう意味では戦い全体を左右した。

やはりモリユキは偉大だ。

そのモリユキの身体を奪って本当に良かったのか。

アルフォンには分からないことだった。

しかし、既にアルフォンはモリユキから生活班長の仕事について十分に話を聞いて理解していた。ヤマトの二大機密である波動エンジンと波動砲に関連しない部署だから、語る口は比較的軽かった。だから、既にアルフォンにはこのままヤマトに乗り込んで生活班長をやっつけのける自信があった。

「そうだ」とアルフォンは言った。「面白い話を聞き込んだ。ガミラス戦役の時、君のグラビア本が出回ったそうだ。艦内で隠し撮りされて、地球との交信が不可能になる前に送信された写真だそうだ。知っていたか?」

「はい」

「知っていた?」

「ええ。地球に戻った後、怒った友達が見せてくれましたから」

「君も怒ったわけだね？」

「いいえ」

「ほう。それはなぜだね？」

「最初から知っていましたから」

「なんだって？」

「ヤマト計画本部は、ヤマトが最後の希望だから、徹底的に PR する戦略に出ました。それこそ、子供用のミニヤマトの模型から、艦内で隠し撮りされた女性乗組員の写真集まで」

「これは驚いたな」

「だから、あの本の構成はしっかりしているはずです。最初から計画的に作ったものなので」

「まさか」

「だからピッチリした艦内服中心の写真で構成され、スカートめくりされて下着を見せしている写真を経由して、最後の 1 枚、シャワーを浴びている全裸の私で終わっているはずです」

「シャワーの中まで撮らせたのか？」

「そこまでの準備期間は無かったので、あれは実は私ではなくそっくりの代役。場所はドックに入っていた旧式戦艦の艦内シャワールームです」

「嘘の写真か」

「ええ」

「しかし、多くの地球の男はあれを君と信じ、いつかはシャワーで押し倒そうと思ったはずだ」

「それが狙い目です」

「ならば、君は人類を救うためなら、自分の身体を道具として投げ出せるというのか？」

「それは……。今の私が人類を救うために身体をあなたに投げ出して秘密を探っていると言いたいわけですか？」モリユキは真摯な瞳でアルフォンを見た。

「なに?」アルフォンはドキッとした。そのようなつもりではなかった。
しかし、状況としてはそうだった。

「では私も1つだけ告白します」

「なんだね?」

「私は、アルフォン少尉、あなたを愛する寸前まで行きました」

「寸前?」

「あなたの心のいちばん大切な部分は嚴重に鍵が掛かっています」モリユキはアルフォンの胸を指さした。「そして、そこにはけして見てはならない秘密が隠されています。ただの女のカンですけど。それが恐ろしいので私はあなたを愛せません」

「愛せない理由は、コダイに貞操を誓ったからではないのかね?」

「違います」

「ではなぜ今でもコダイの写真を大事に持っている」

「持ち物はチェック済みですね」

「済まない。職務なので」

「古代君の写真を手放せないのは、一度はアルフォン少尉を愛する寸前まで行ってしまった自分が古代君の妻になるに値するか、自問自答するためです」

「コダイを愛していないのか?」

「愛しています。誰よりも大切です」

アルフォンは頭を抱えた。

これは予想していたよりも三倍は複雑だ。

愛していると断言するのに、自問自答を発生させている。モリユキの心はいったいどこに行こうとしているのか。そもそも、アルフォンの演技はモリユキの心情に対応出来ているのか。シナリオ通りの結末をきちんと出すことができるのか。

アルフォンは急に自信を喪失した。

翌日。アルフォンは、モリユキの身体になった初日に面倒を見てくれた

女、マリアの連絡先を調べると、電話を掛けた。

「アルフォンさんね。森雪さんの身体を手に入れたラッキーな人。よく覚えていますよ」

「どうにも行き詰まった。アドバイスが欲しい」

「私にできることなら」

「知り合いの女性に、ある男を愛していると断言する者がいる。でも、自問自答もしている。どういうことなのだ。愛しているなら、その男のところに走ればそれで良いのではないか？ なぜ走らずに自問自答を繰り返せるのだ？」

「よくあることよ」

「よくある？」

「女は複雑な生き物だってこと。あなたもそうなったのだから、理解しないとね」

「分からないな」

「あなた、好きな食事は何？」

「地球に来てからは、ハンバーグを気に入った」

「昨日の夕食は？」

「シチューだ」

「なぜハンバーグを食べないの？ 好きなんでしょ？」

「シチューも悪くないぞ」

「そういうことよ。誰かを好きであることは、他の誰かを拒絶することを意味しないわ」

アルフォンは感謝の言葉を言って受話器を戻した。

愛は排他ではない。

愛は包み込むものだ。

だから、モリユキの愛は、コダイのみならずアルフォンまで包み込みそうになった。

そう言いたいのだろうか。

第三章 決意

翌日の会話は少し辛辣になった。

アルフォンが、モリユキがこれまで語らなかった話を求めたからだ。

「何を望んでいらっしゃるの？」

「君の男関係の過去を知りたい」アルフォンは言った。

「意味が分かりません」

「では言おう。好きな女性が他の男に抱かれていると知ると興奮する趣味があるのだ」もちろんそれはアルフォンの嘘だった。

「寝取られ趣味ということ？ そういう変態はいると聞いたことがあるけれど」

「そんな趣味に幻滅したか？」

「いえ。そうではなく、真実の話を知ってしまったら、あなたは私に幻滅するかも知れないという意味。もう好意を持って家には置いてもらえないかもしれません」

「態度は変えない。だから話を続けてくれ。コダイとは何回寝たんだ？」

「古代君とセックスはしていません」

「なんだと？ しかし君は処女ではない」

「保安規定でそこまで私の身体を調べたの？」

「君が傷でうなされている時にね」

それは嘘だった。モリユキが処女ではないことは、自分の身体として検査済みだった。

「では話します」とモリユキは言った。「ガミラス戦役でのイスカンダルへの航海での私の正式な役職は、ダッチワイフの管理です」

「なんだと？」

「しかし、それでは問題があるので、名目上は生活班長です。もっとも、あちこちの部門に応援に出ているうちに、何が正式な役職か分からなくなってしまいました」

「それで？」

「動くダッチワイフは、1年間使えるはずでした。しかし、航海開始早々

に全て壊れてしまいました。地球に戻ることもできません。真田さんにも直せませんでした。いえ、無理を言ったら直してくれたかも知れませんが、工作班にはもっと大事な仕事がいくらでもありました。だから、特にストレスが大きい数名は、私が自分の身体で慰めました」

「コダイは？」

「彼は精神的には安定していて、艦長代理に指名されるほどでした。だから慰めてはいません」

「まさか」

「スケスケのネグリジェを着て、クルーを部屋にお迎えして秘密の儀式を行って帰す。実はそんなことを何回もやりました。古代君にはとても言えない秘密です」

「なぜ言えないのだ」

「古代君が知れば絶対に禁止させたいでしょう。インモラルな振る舞いである過ぎるし、古代君は他の男に惚れた女が寝取られて喜ぶ趣味もあります」

「ふむ……」とアルフォンは考え込んだ。「しかし、君は実行した。なぜだ」

「ヤマトが生還するにはどうしても必要だからです。ヤマトが生還できれば古代君の株が上がります。古代君のためです」

「コダイのために、コダイが嫌がる行為を行った、というのかね？」

「そうです。だから私は汚い女です」

モリユキは泣き始めた。

「おいっ」アルフォンは思わずモリユキをなだめた。「そんなことはない。君は素晴らしい女だ。私はそう思う。泣いてはいけない」

「だって、古代君と出会う前の私はもっと酷かったんですよ!」とモリユキは叫んだ。「縛られて百人の男から、雪を降らされて自分の身体が真っ白になるような遊びだってやったことがあるのよ。それも喜んでっ!」

アルフォンは自分が経験したとそっくりのことをモリユキも経験済みと知って焦った。

「しかし、今は藤堂長官の秘書だ」とアルフォンは言った。

「ええ。藤堂長官に見出されたのも、そうやって遊び回っていたときですもの」

「なに？」

「藤堂長官の部下の参謀に酒場で口説かれてラブホテルに直行。そこで、気に入られて藤堂長官の秘書に推薦されたのよ。その時は病院の人手が足りないからそっちに回ってしまったけれど、地球に戻ってからは本当に藤堂長官の秘書になれたわ」

「ユキ……」

「でも、どれだけママの目を盗んで遊んだと思っているのよ」

「ママ……？」

「ママの期待の裏切りパパの期待も裏切り古代君の期待も裏切って綺麗に取り澄ましているのが私なのよ」

それっきりモリユキは泣き止まず、何も言わなかった。

仮想空間から抜けると、アルフォンも途方に暮れた。

「ジオリン、どうしたらいいと思う？」

「さあ」

「仮想空間での会話は全て聞いていたのだろう？」

「ああ」

「ここまで情緒不安定になったモリユキが、意図した通りに藤堂のところに逃げてくれると思うか？」

「いや、好機だろう」

「なぜ？」

「判断に冷静さを欠くなら、その方が行動を強制しやすい」

「分かった。プロポーズだな」

「そうだ」

アルフォンは、コダイの写真を取り出した。

そして写真につぶやいた。

「これで良いのだろうか。コダイよ」

アルフォンはずっと写真のコダイの顔を見つめた。

アルフォンはジオリンのシナリオ通り、モリユキにプロポーズした。

しかし、プロポーズを受け入れると言ったモリユキを、なじった。

「お前の心にはコダイという男しか住んでいない」

「重核子爆弾の秘密を知りたいだけであろう」

「もう行け」

そして付け加えた。

「私は技術将校として重核子爆弾で待っている。そこまでたどり着いたら重核子爆弾の秘密を教えよう」

モリユキは飛び出していった。

これでアルフォンの仕事はひとまず終わりだった。

あとは仮想空間内の重核子爆弾で待つだけだ。

仮想空間を出ると、ジオリンに質問した。

「どうだ。モリユキはトードーに接触しそうか？」

「オッケーだ。モリユキは欺瞞コースを取りなら地下の旧地球防衛軍司令部に向かっている。あそこがパルチザンの本拠と見ていいだろう」

「仮想空間にパルチザンの基地を配置したか？」

「ああ、偽のトードーごと配置した」

「本物の旧地球防衛軍司令部は？」

「既に占領軍の一個中隊が奇襲に向かった」

「一個中隊？ 戦力が少なくないか？」

「迅速に動かせるのはそれだけだったのだ。奇襲になるから素早い方が有利だ」

「そんなものかね」

「戦闘部隊の受け売りだ。事実かどうかは保証の限りではない」

ここで仮想世界と現実世界は決定的に別物になった。

現実世界では、パルチザンの本部は壊滅して、トードーは死んだ。地下に備蓄した高純度ハイパー・ガソリンのタンクの脇にいたトードーは、タンクごと全焼。骨しか残らなかった。パルチザンの本部も壊滅した。まだ地方で抵抗している戦闘部隊は残っているが頭は潰せた。あとは各個に分断して1つ1つ潰すだけだ。

一方で仮想世界では状況が違った。モリユキは、欺瞞に成功し、敵に気付かれずにパルチザンに合流した。そして、知っている情報を説明し、重核子爆弾の攻略を練っていた。トードーも生きている。

しかし、そこにアルフォンの出番はなく、しばらく暇になった。

かといって、外出は無制限に許されなかった。

情報部の何人かは、あの孤島のパーティーで会った男とカップルになっていて時々デートしていた。

しかし、アルフォンはその気になれなかった。

そしてコダイの写真を見て過ごした。

作戦は最終段階に入った。

アルフォンは重核子爆弾に陣取り、モリユキが仲間を連れて攻めて来るのを待った。

そして、優秀なモリユキはひそかにあたえたヒントを正しく解釈し、重核子爆弾を攻略した。空間騎兵隊員を伴って、モリユキは現れた。

こちらの操り人形の空間騎兵隊員は、正しくアルフォンを撃ち殺して、最後に告白して死ぬ光景を演出した。

仮想空間内の死は痛くも痒くも無いが、アルフォンは苦しげであることを装いながら、重核子爆弾の秘密を説明した。起爆装置はデザリウムと地球にあり片方だけを破壊しても無駄であること。デザリウム、地球の順に破壊しなければならいこと。そして、自分達が地球人の身体欲しさに地球に來た機械の身体であることを伝えた。

そして、アルフォンは仮想空間で死んだが、現実には死んだわけではなか

った。単に仕事が終わっただけだった。

アルフォンは、仮想空間から出ると、ジオリンに質問した。

「首尾はどうだ？」

「モリユキはヤマトと連絡を取った。通信をトレース中だ。ヤマトは現実のモリユキからの連絡だと思って対応している」

「つまりどういうことなんだ？」

「奴等は、重核子爆弾が制圧済みであり、デザリウムさえ攻略すればこれで地球の勝ちだと思っている」

「そうか」

「しかし、デザリウムの住人は既に大半が疎開済みだ。聖総統の他数名しか残っていない。あれを破壊されてもあまり痛くない」

「破壊できたら、だろう？」

「そうだ。おそらく破壊できない」

「仮に破壊できても、重核子爆弾は健在。こちらは起動スイッチを握っているから戦勝気分です帰ってきたヤマトの降伏を求められるわけだ」

「そういうことだ」

しかし、アルフォンは釈然としなかった。

ジオリンのシナリオ通りに踊らされたモリユキが不憫に思えてならなかった。

既に仮想現実のスイッチは切られている。

スイッチを切った時点でモリユキは消えた。

勝利を確信し、コダイとの再会を信じたモリユキはその確信ごと消えてなくなった。・

はたしてこれで良いのだろうか。

母国の行いは正しいのだろうか。

情報部の行動は正しいのだろうか。

同じコダイを愛した者として、コダイを騙すようなこの行為は耐えられない。

そんな気がした。

それに気付くと、すぐに武器を持ってアルフォンは車を走らせた。

目的地は重核子爆弾。

アルフォンは情報部のパスで重核子爆弾の内部に入った。

そのまま起爆装置を破壊できるはずだった。

しかし、仮想空間内の重核子爆弾とはセキュリティが違っていた。仮想空間側の重核子爆弾はずっと甘くなっていたのだ。想像もしなかった検問があり、そこでアルフォンは止められた。そこでは命令書の提示を求められたが、そんなものはもちろん無かった。

起爆装置は次の部屋だというのに、そこまでたどり着けないのだ。

警備員は五名。早撃ちで全員を撃ち殺せるかな。

アルフォンはそう思った。

その時、壁が爆破されて、地球防衛軍の空間騎兵隊員数名が銃を撃ちながら駆け込んできた。警備兵が応射して、空間騎兵隊員はその場で射殺された。

しかしそれで十分だった。

アルフォンはその隙に警備兵を撃った。

空間騎兵隊の制服を着た男が数名、穴から部屋に踏み込んできた。

アルフォンは彼らに銃を向ける気にはなれなかった。

自分を殺すなら殺せ。ただし、起爆装置だけは破壊する。そう思った。

しかし、そういう成り行きにはならなかった。

「森君じゃないか! よく生きていたな!」と空間騎兵隊の制服を着た男の1人がヘルメットを脱いだ。

出てきた顔はよく知っていた。

地球防衛軍司令長官のトードーだ。

「あなたは死んだはずでは」

「死んだのは影武者だ」とトードーは言った。「こうして普通の空間騎兵隊員のふりをして一緒に戦ってきたのだよ」

「それより、重核子爆弾の起動装置は隣の部屋です。あれを破壊しなけ

れば。他の警備兵が来る前に」

「なんだと？」

アルフォンは隣に部屋に入った。

後から、トードーと、空間騎兵隊員が続いた。

しかし、一步遅かった。警報が鳴り響き、黒色の警備兵が大挙して迫ってきた。

「理由は分からないが、森君は事態を把握している。君たちは警備兵を食い止めろ！」

空間騎兵隊達が、その場にあった椅子と机を並べて即席のバリケードを作って応射した。しかし、その程度の防壁はあまり役に立たず、数名がすぐに射殺されて吹き飛ばされた。

アルフォンは自分の罪が増えたような気がした。

しかし、何もしなければ罪が増える。

アルフォンは、弾が無くなるまで起動スイッチに銃弾を撃ち込んだ。

起動スイッチは完全に破壊されていた。

そして、振り返った。

「全員聞け！ 起動スイッチは破壊した。ここで戦うことは無意味だ。もう撃つな。銃を降ろせ」

それでも撃っている者が黒色側いた。

「馬鹿者、もう戦う意味など無い！ もう撃つな！ それとも私に射殺されたいか！」

アルフォンは既に弾が入っていない拳銃を構えてバリケードを越えてその者に迫った。拳銃は残弾なしを示す赤マークが出ていた。それを見られるとハッターがばれる。しかし、相手の男はアルフォンの胸にある暗黒星団帝国の紋章入りブローチに目が釘付けだった。

相手の男は銃を下ろした。

「森君！」 トードーが叫んだ。

アルフォンは彼を振り返った。トードーがアルフォンを見ていた。その背後には多くの空間騎兵隊員が並んで、やはりアルフォンを見ていた。

「これで地球側のスイッチは使えません」とアルフォンは説明した。「あとはコダイがデザリアムのスイッチを破壊すれば、黒色は切り札を失います。保証の限りではありませんが」

「雰囲気が変わったな」

「トードー。どうしても説明を要することが一つあります」

「雰囲気が変わった理由かね？ それより今までどこにいたのだ？ なぜスイッチのことを正確に知っていたのだ？」

「全て説明します。ただし、説明するゆとりが許されればですが」

「どういうことだね？」

「コダイがデザリアム側のスイッチの破壊に失敗すれば結局のところ戦力バランスは変化せず、私は処刑されるでしょう。そして、残念ながらコダイがスイッチを破壊できる可能性はとても低い。私としてはトードーと部下達が早急にここを立ち去り、地下に隠れることをお勧めする」

「しかし、森君……」

そのとき、グロイザー部長から緊急連絡が入った。

アルフォンは通信機を取り上げた。

「アルフォン、緊急事態だ。戻って来い」とグロイザーは慌てた口調でいきなり言った。

「私は今重核子爆弾内の起動スイッチを破壊しました。警備員数名も射殺しました。もう情報部将校の資格がありません」

「そんなことはどうでもいい」

「そんなこと……？」

母星の切り札を無力化して味方まで数名殺害したのだ。

それを、どうでもいい、と言う事態とはいったい何か。

「おい、後にいるのは誰だ」とグロイザー部長が叫んだ。

「トードーです。死んだと報告されたのは影武者でした」

「彼も連れてこい。いや、丁重にお願いして賓客としてお迎えする。武装は解除するな。警護の兵も一緒に連れてこい」

「どういうことですか」

「我々の母銀河ごとデザリウムが吹っ飛んだ。同胞はみな死んだ。残ったのは、地球の占領軍と遠くの宇宙にあった少数の艦隊だけだ」

「なんですって？ もう1回お願いします」

「繰り返す。同胞の99%は死に絶えた。ヤマトにやられた。いやそれは正確ではないな。デザリウム防衛のためにエネルギーを集中しすぎたのだ。確かに鉄壁の防備はできたが、いざ破壊されるとエネルギー量が多すぎて銀河ごとまとめて壊滅させてしまった」

「嘘でしょう。衝撃波が光速で伝播しても全銀河の壊滅には何万年も掛かるはずです」

「集められたエネルギーがエネルギーだけに超光速で伝播したのだ」

「なんですって。それでは誰にも逃げるチャンスが残らない」

大きな手が通信機を奪い取った。

「私は藤堂だ。地球防衛軍司令長官だ。君は誰だね？」

「私は黒色星団帝国情報部のグロイザー・トリプルエックスです。お目に掛かれて光栄です。トードー長官」

「いったい何が起きているのだね？」

「ヤマトは我々の母星を破壊しましたが、その時に疎開先の惑星や、支配下にある星系も含め、全てまとめて吹っ飛ばしてしまいました。現在、全く新しい新銀河が誕生しつつあるところです」

「もっとズバリ言うとはだね？」

「一切の補給を受けることができず、戦力の大半を失った我々は降伏するしかありません。そのための交渉を行わねばなりません」

「重核子爆弾で人類を皆殺しにして君たちだけ生き延びようとは思わなかったのかね？ 急いでスイッチを入れればスイッチが破壊される前に起動できたかもしれない」

「トードー長官。それは無意味な仮定です」

「なぜだね？」

「我々は地球人の生産活動に依存して生きています。重核子爆弾とは恫喝の道具であり、使った時点で我々は事実上の敗北になります」

「良からう。まずは話し合いの場を持とう」

意図せずして、黒色戦役終結の場に、平少尉だったはずのアルフォンは立ち会うことになってしまった。そのことにアルフォンは慄然とした。

通信機を返され、アルフォンはその場に立ち尽くした。

「それよりも森君、君に何があったのか説明してくれ」

アルフォンは慌てて周囲を見回した。

空間騎兵隊員が「モリユキだ。モリユキがやった」と口々に話していた。

ここで自分がモリユキではないと明かすのは適切ではないように思えた。

しかし、モリユキをよく知る藤堂はすぐにアルフォンがモリユキではないことを知るだろう。彼には説明しなければならない。

「トードー長官と二人だけでお話がしたいと思います」

「いいだろう。どこで話す?」

「私の車の中ではどうでしょう。これから情報部に移動しなければなりません」

「しかし、空間騎兵隊員達は……」

「別の車で一緒に走れば良いと思います」

「しかし」

「これは黒色の情報部の公用車です。攻撃する者はいません」

「分かった。しかし、空間騎兵隊員達が乗る車はあるのかね?」

「緊急事態ということで、車の供出をお願いしてみましょう」

アルフォンが窓口で相談すると、数台を融通してもらえた。

しかし、係の者は、アルフォンと行動を共にしている空間騎兵隊員を怯えた目で見つめていた。

空間騎兵隊員達も緊張していた。

アルフォンは駐車場から自分の車を走らせた。

「では、話を聞こうか」と助手席のトードーが言った。

「私はモリユキではありません。黒色星団帝国の情報部将校、アルフォン少尉です。いえ、これだけの反逆行為を働いたのです。少尉の資格も剥奪でしょう」

「森君ではない？」 トードーは目を見開いた。

「モリユキの身体はアルフォンが使用しています」

「森君の心はどうなったのだね？」

「記憶キューブに保管されています。仮想世界に行けば会えます」

「何のために森君の身体を……」

「我々はもともと生身の身体欲しさに地球を奇襲しました。そして、コダイ達が地球を連絡艇で離れるとき、モリユキだけ置き去りになりました。そして、置き去りにされて倒れたモリユキを私が見つけました。優れた身体は奪い合いになっていましたから、確実に自分のものにするために、即座に意識転送を実行しました」

「ならば、もう一度意識転送を実行すれば森君の心はその身体に戻ってくるのかね？」

「残念ながら……。もう無理です」

「なぜだね？」

「その機械の動作原理は不明なのです。アクエリアスの遺産の1つです。そして、その機械はこの宇宙に三台存在することが知られていました」

「三台もあるのならどれかを使って転送すれば……」

「一台はイスカンダルにあって、瀕死のコダイマモルの人格を、彼を模したイスカンドロイドに転送するために使われました。しかし、機械はイスカンダルの自爆に伴い永遠に失われました。二台目と三台目は黒色星団帝国にあって、二台目は重核子爆弾の内部に組み込まれた形で地球に送り込まれてきました。しかし、稼働させてすぐにオーバーヒートで停止して、二度と動かなくなりました。部品が故障したと思われますが修理方法が分かりません。そして、母銀河の研究者が失われた今、おそらく修理できる見込みはないと思います」

「三台目は？」

「デザリウムにあって、コダイが波動砲でデザリウムごと破壊しました」

「なんと……」

「意識を別の身体に移動させる手段は事実上完全に失われました。です

から、この身体にモリユキの意識が戻る日はおそらく来ないでしょう」

「森君と話がしたい」

「仮想空間でならできるでしょう」

「それから、地球人の前では、君は森雪と言うことにしておいてくれ」

「なぜですか？」

「空間騎兵隊員は君を重核子爆弾の起動スイッチを破壊しに来てくれた森雪だと思っている。既に情報が飛んでいるはずだ。今さら、君が救国の英雄の一人である森雪の身体を奪った敵国人だと言ったら何が起るかわからない。混乱が起こるだけだ」

「一理はあります」

「グロイザー隊長には内々をお願いしたいと思うが、当面は私の秘書として勤務して欲しい」

「森雪の本来の役職ですね」

「そうだ。あくまで君を森雪として扱いたい」

「しかし、もしも黒色側があくまで私の処刑を要求してきたら？」

「我々が一丸となってそれを止める」

「なぜそこまで……」

「母国を裏切って重核子爆弾のスイッチを破壊してくれた恩人だからだ。地球人は恩人に報いることをためらわない」

「おそらく全ての地球人が同じように高潔だとは思いますが、トーダーの意気込みという意味で有り難く受け取っておきます」

会議室で、グロイザーとトーダーは顔を合わせた。アルフォンはその中間に座ることになった。

そして、グロイザーとトーダーは可能な限り戦闘行動を中止することで合意した。可能な限りというのは、黒色の全員がグロイザーの部下というわけではなく、トーダーの指揮下にはないパルチザンも多かったからだ。そのため、戦闘を中止しない者達も多かった。

しかし、翌日に入り、白旗を掲げて宇宙から帰還したガリアデスに乗っていたカザン地球占領軍総司令長官と、収容所から解放された地球大統領

が会談し、正式に戦争終結の書類にサインすることで全ての戦闘行動は終結した。全ての黒色の戦闘部隊はカザンの指揮下にあり、全ての地球人パルチザンは大統領の指揮下にあるものとみなされたからだ。

それでも戦いの終結を望まない者達が両陣営のどちらにもいたが、戦闘をあえて続けようとする者は、黒色地球連合軍によって鎮圧された。

その間、アルフォンはトードーの秘書として走り回った。グロイザーは喜んでアルフォンをモリユキとしてトードーに差し出した。これには下心がミエミエだった。グロイザーは、地球側の中枢にスパイを送り込んだつもりなのだ。しかし、アルフォンとしては、知り得た機密をグロイザーに流す気は無かった。

特に所在を発見できなかったアンドロメダ級を始めとする艦艇の数々。それらはエンジンを起動するエネルギーが得られず、全て動き出す可能性も無かったことはわざわざ伝えるほどでもない。

当初、アルフォンはトードーの秘書という肩書きだけで実際は何もしないつもりだった。それはそうだ。トードーが扱う地球側の機密をアルフォンが見てしまうのは好ましいことではないだろう。しかし、トードーは多忙で人材は足りなかった。スイッチを破壊したアルフォンは敵国人と分かっているにもかかわらず、次々と機密に接する仕事を依頼された。

そういう補助的な業務は情報部でもこなしていたので、アルフォンはトードーの役に立った。そして、てきぱきと仕事をこなすアルフォンを見て「森雪が戻って来た」という噂はますます広まった。

終戦の条件はおおむね痛み分けということになった。

先に手を出したのは黒色側だが、ヤマトのデザリウム攻撃でも母銀河の大半が巻き添えで消失するという大殺戮が発生してしまい、お互いに負い目が存在していた。お互いに相手の振る舞いにはこれ以上文句を付けない……というのが基本だった。

黒色人の難民キャンプも作られた。彼らには帰るところが存在しないのだ。戦車や戦艦が解体され、その資材で施設が建設されていった。

それと平行して、多忙さの合間を縫って、仮想空間でのモリユキとトー

ドーの対話も設定された。

当初、トードーとモリユキだけの対話を設定した。

しかし、モリユキはアルフォンにも会いたがった。しかも、モリユキの身体を持っているアルフォンだ。

全ての事情を知ったモリユキとアルフォンは対峙した。

場所は、モリユキとアルフォンがかつて向かい合ったあの家だった。

「事情は全て藤堂長官から聞きました」とモリユキは言った。「ですから事情説明は一切要りません」

「すまない」とアルフォンは頭を下げた。「自分の振るまいは軽率だったと思う」

「あなたを糾弾するのは簡単です。でもそれは意味が無さそう」

「えっ？」

「古代君はあなたの同胞をととてもたくさん殺した。私の身体があなたに奪われたとしても、その古代君の罪の前ではあまりにも小さいわ」

「すまない」

「今の私にはあなたに聞きたいことが一つしかありません」

「なんでしょう」

「あなたは古代君の写真を大事に持っているそうね。なぜ？」

「お恥ずかしい話だが、私はコダイに惚れてしまった。モリユキに代わって結婚できれば幸せだろう。そんなことまで思ってしまったのだ」

「ならば結婚なさい」

「えっ？」

「アルフォン、あなたが古代君と結婚して子供を作りなさい」

「なぜ……」

「産まれてくる子供は紛れもなく、私と古代君の子供だからです」

アルフォンは衝撃を受けた。

確かに、身体の持つ遺伝子はモリユキのものだ。産まれてくる子供はモリユキの子供だ。アルフォンの子供ではない。

つまり、アルフォンは永遠にモリユキには勝てない。

それにも関わらず、モリユキの承認を得た上でコダイの妻になるという誘惑は大きかった。

「でも、その前にアルフォンを妻として受け入れるように古代君を説得しないとならないわね。その点では手助けするわ」

しかし、あくまでモリユキが好きなコダイが、会ったことも無いアルフォンを受け入れてくれるかは分からなかった。

そして、四十万光年の彼方より、宇宙戦艦ヤマトが帰還した。

ヤマトはこれまた微妙な存在だった。

地球人から見れば救国の英雄艦だが、黒色人から見れば同胞を虐殺して帰還した悪魔の船なのだ。

もう一つ問題があった。

艦長代理コダイススムと離ればなれになった婚約者モリユキのドラマチックな再会を地球のマスコミはいやが上にも期待していた。デザリウム側のスイッチを破壊したコダイススムと、地球側スイッチを破壊したモリユキが、結婚を約束した仲とは実にドラマチックだ。

アルフォンは、宇宙港で「コダイ君!」と叫びながら掛けよって抱きつくことを要請されてしまった。もしも、勘の良いコダイから「おまえはモリユキではないな。いったい誰だ」などと言われてはマスコミの期待をぶち壊すことになる。

だからアルフォンは抱きつくとすぐコダイの耳元で囁いた。

「今はこのまま感動の再会を演じていて下さい。あとで大事なお話があります。藤堂長官も一緒です。お時間を頂けますね?」

コダイは一瞬だけ表情を緊張させてからうなずいた。そして囁き返した。「いいだろう。森雪の姿をした君が誰であれ、事情がありそうだ。話を聞こう」

コダイは、藤堂の執務室で敬礼した。

アルフォンは、それを横から見守る形になった。

「何かお話しがあるそうですが」コダイは言った。

「ショッキングな話だが、できるだけ冷静に聞いて欲しい」とトードーは言った。「そこにいる女性は森君のように見えるが、本当は森君ではない。しかし、ここでは森君として扱われている」

「仰る意味が分かりません」

「分かっている。黒色星団帝国が地球を攻めた理由は、自分達の機械の身体を生身の身体に取り替えるためだ。そして、地球に置き去りにされて気絶した森君の身体は、黒色のアルフォン少尉が発見した。アルフォン少尉は、森君の身体を欲した。そして、情報部所属のアルフォン少尉は、森君を目覚めさせることなく、情報部特権で意識の転送を実行させ、森君の身体を手に入れた。そこにいるのは、身体は森君だが、中身はアルフォン少尉だ」

「やはり分かりません。そのアルフォン少尉という人物だとすると、敵ではありませんか。いえ、今はもう敵ではないとしてもかつての敵ではありませんか」

「そうではないのだ。アルフォン所為は自らの行動を恥じ、重核子爆弾の地球側起爆装置を破壊してくれたのだ。言わば我々の味方なのだ。黒色から見れば裏切り者でもある」

「地球の味方……ということですか?」

「味方をしたわけではない」とアルフォンは言った。「ただ、モリユキを騙し続けることに耐えられなくなっただけなのだ」

「ではユキは。本物のユキはどこに?」

「記憶キューブの中に情報として残っている。仮想現実の空間に入れば会って話すことができる」

「仮想現実というと、ヤマトの医務室の立体映像装置のようなものですか?」

「それも一種の仮想現実だ」

「それはユキには永遠に触れることができない、という意味ですか?」

「そうだ。この宇宙に残された既知の最後の転送を行う機械はデザリア

ムにあって、君が波動砲で破壊してしまったのだ」

「それは、ユキが元に戻る最後の希望を自分の手で破壊してしまった、という意味でしょうか」

「そういうことになる」

「なんてことだ……」

コダイは悔しそうに顔を伏せた。

「話を続けても良いかね？ それとも続きは今度にするかね？」

「大丈夫です、続けて下さい」コダイはうながした。

「アルフォンの立場はとても微妙だ。地球人から見ればモリユキの肉体を奪った大悪党。黒色人から見れば、仲間を裏切った大悪党だ」

「大悪党……」

「我々から見れば、重核子爆弾の地球側スイッチを破壊してくれた大恩人だがね」

「なるほど」

「であるから私としてはアルフォンを守らねばならない。アルフォンを守る最上の方法は、あくまで森雪だと扱うことだ。森雪ならば、大悪党と見なされる理由が消失する。身体は奪われていないし、仲間の裏切りも存在しない」

「しかし、それではアルフォン少尉が自分の婚約者ということになってしまいます」

「その通りだ」藤堂はうなずいた。

「もしや。ほとぼりが冷めるまで、アルフォン少尉を婚約者として扱えと。そのようなご命令でしょうか？」

「命令ではない。お願いだ」と藤堂は告げた。

「しかし」

「暗黒星団帝国一千億の人間がほとんど壊滅したのは」と藤堂は言った。

「古代、君が撃った波動砲のせいだ。疎開した者達まで巻きこまれたのは君が意図したことではないかもしれない。しかし、君が撃った波動砲で殺してしまったのだ」

「自分に罪があると?」

「罪は我々全員にある」と藤堂は言った。「しかし、少しだけで良い。アルフォンの身の安全を維持するための心遣いが欲しい」

「すみません、考えさせて下さい」と古代は言った。

「森君にも意見があるようだ。仮想空間で会っていくといい」
時代はうなだれてうなずいた。

仮想空間にはトードー、コダイ、そしてアルフォンが入った。アルフォンはモリユキの姿を選択した。それが本物のモリユキの願いだったからだ。

トードーはコダイにショックを与えないように詳しい説明をしながら仮想空間内をコダイと歩き、モリユキのいる場所に移動した。

しかし、コダイは既に十分にショックを受けていた。

無理もない。

彼は、自分の手で希望を破壊してしまったのだ。

おそらく、コダイは子供っぽい正義感によって波動砲を撃ったに過ぎないのだろう。そうしなければ、占領された故郷を開放できないからだ。

しかし、その結果は敵国家の一般市民までを虐殺し、最愛の女性が元の身体を取り戻す最後の希望まで破壊してしまったのだ。

モリユキは太古の女神のような出で立ちで、泉のほとりで待っていた。

「会えて嬉しいわ、古代君」モリユキは言った。

「すまない。君を元に戻す最後の希望は自分のこの手で破壊してしまった」

うなだれるコダイにモリユキは優しく手をさしのべた。

「嘆かないで」モリユキは言った。「最後の希望はまだ残されているわ」

「最後の希望?」

「そう。パンドラの箱は開かれてしまった。でも、パンドラの箱には希望が残るものよ」

「希望とは何だ。君が元の身体に戻れる可能性があるのか?」

「故障した機械が残っている以上、真田さんがあれを修復できる可能性

はあります。しかし、真田さんの見通しでは最低でも十年以上の研究が必要。最悪は、生きているうちにはできないかもしれない、という見通し」

「それは希望とは言えない」

「ええ。私が言った最後の希望はそれではないわ」

「じゃあなんだ」

「古代君。アルフォンとの間に子供を作って」

「なんだって……?」

「今アルフォンが持っている身体は正真正銘の森雪の身体。だから、その身体から産まれる子供は正真正銘森雪の子供。私の遺伝子を受け継いだ子供。その子供の父親は古代君であってほしい。これが私の最後の願いよ」

「でも、僕が愛しているのは君だけだ」

「もし愛しているのなら、私の願いを聞いて」

「しかし……」

「お願い」

コダイは返事ができず、硬直した。

仮想空間を出ると、コダイはアルフォンを誘ってラウンジでコーヒーを飲んだ。

「君の考えも聞きたい」とコダイは質問した。

「なんでしょう」

「僕と君とで子供を作る。それはユキの願いだ。しかし、君の願いではない。君にユキの子供を産ませるのは、君の望むところではないだろう。それがユキの最後の希望であることは分かるし、自分とユキの子供達にパパとママの青春を語るにはそれしか方法は残されていない。しかし君の気持ちはどうなんだ」

「私は、モリユキからあなたの話を聞き、モリユキの所持品からあなたの写真を手に入れて、それによってあなたに惚れ込みました。それは事実です」アルフォンは説明した。「恋をしたと言っても良いでしょう。しかし、実際に会ったらどうか分かりません。現実は残酷です。遠くにいたら美化

された人も、実際に会うと大したことはないかも知れません。敵母星を撃破して意気揚々と帰ってきた英雄なら、男として面白みはないかも知れません。しかし……。真摯に痛みを受け止め、今、私の気持ちの心配をしてくれたあなたは本当に素晴らしい人間だと分かりました。私はあなたとモリュキの子供を産みます」

「本当にいいのか？」

「あなたが愛しているのはモリュキ。私ではありません。でも私はあなたを愛します。愛とは自分を愛せよと強制するものではないはずです。片方向でも愛は愛です」

「しかし、自分は君たちの同胞をたくさん殺してしまった」

「分かっています。しかし、それを理解した上で殺したわけではありません。波動砲の標的になったデザリウムから疎開しなかったのは、聖総統と聖総統に魂を売ったサーダと若干の側近だけです。そして、聖総統は実際には同族ではありません。あれは外から来て玉座に座った者です」

「聖総統は同族ではない……。？　ならどこから来たんだ？」

「分かりません。アクエリアス・チルドレンに相当するどこかの星の権力争いに負けて流れてきたらしい、としか分かりません」

「アクエリアス・チルドレン？」

「宇宙に散らばる人間の総称です。太古に水の惑星アクエリアスが種を蒔き、様々な星に同じような人間が生きようになったという神話です」

「なるほど。ではイスカンダル人もガミラス人も彗星帝国人も君たちもアクエリアス・チルドレンなのだね？」

「地球人もです」

「分かった。しかし1つだけ確認をしたい。君の家族、両親や兄弟も僕はこの手で殺してしまったのかい？」

「兄弟はいません。両親はおそらくデザリアムの爆発に巻きこまれて死んだと思います。しかし、それをコダイのせいだとは思っていません。戦争を始めた連中が愚かだったと思っています」

「済まない」

結局、コダイはその場で決断できなかった。

翌日やっと答えを携えてやってきたコダイは告げた。しばらくお互いを良く知るために恋人関係を続けよう……と。アルフォンは少しガッカリした。このまま、コダイと結婚し、妊娠出産に進むと思っていたからだ。

第四章 戦役

しかし、いきなり結婚に進まなかったのはある意味で良かった。

世の中の混乱は収拾しなかったからだ。

地球人の身体を奪ってしまった黒色人への風当たりは強かった。しばしばリンチ事件が発生した。起こしたのは一般の地球人達だ。彼らにしてみれば、不当に身体を奪った彼らは泥棒だ。一方の黒色人達も、地球人に一族丸ごと家族を含めて殺された怨みは深かった。しばしば報復に難民キャンプから黒色人の集団が出てきて暴力を振るった。

名目上モリユキとなっていたアルフォンが狙われなかったのは有り難いことだ。

しかし事件が多発すると、トードーの秘書としてのアルフォンの仕事は増える一方だった。すでにお飾りの秘書でいることは不可能だった。黒色の事情に通じたアルフォンは、トードーの貴重な片腕になってしまったのだ。

そして、最終的に最も怖れていたことが起こった。

難民キャンプに最後に残された航行可能な宇宙戦艦、ガリアデスが消えたのだ。超低空でレーダー警戒網が手薄なところに飛び、そこから宇宙に出てすぐにワープしたものと思われた。

それらしい痕跡はいくつか残されていたが、決め手はなかった。

「ガリアデス一隻で地球艦隊と戦うことは自殺行為だ」とトードーは言った。「森君、君の見解はどうだね。いったい何のために乗り逃げしたと思うかね?」

もちろん、形式上はモリユキに呼びかけているが、実際には黒色人を良く知るアルフォンへの問いかけだった。

「そうですね。最もありそうなのは、別天地を探して地球を見限ったという解釈です」とアルフォンは説明した。「しかし、報復のために飛び立ったという可能性もあります」

「報復？　しかしガリアデス一隻では……」

「地球を滅ぼせるだけの戦力を持ったアクエリアス・チルドレンの国家は他にいくつもあります。それらに連絡を付けて説得して地球に派兵させる可能性があります」

「そんなことが確実にできるのかね？」

「できません。かなりの賭です。相手がうんと言われれば地球を攻めることはできません」

「そうか。しかし、別天地という案は悪くない」とトードーは言った。「黒色人が移住できる新天地を探してみよう。同じ土地に住んでいなければ摩擦は起きにくいだろう」

トードーは、第二の地球探しのためのプロジェクトを開始させた。

しかし、その話は突然ひっくり返った。

黒色人の移住作を探すという話から、全人類の移住作を探すという話に入れ替わったのだ。

投入される機材も突然最上級に跳ね上がった。

なぜなら、太陽の異常増進が明らかになり、地球が飲み込まれてしまうことが分かったからだ。

あくまで自然現象という前提で考える地球人に対して、アルフォンはすぐに消えたガリアデスとの関連を考えた。

しかし、ガリアデスの全エネルギーを使用しても、太陽をここまで変えることはできない。

いったいどうやって？

それを考えると、アルフォンにも答えが判らなかった。

ある日、アルフォンに電話があった。

コダイからだった。

「ヤマトは第二の地球探しのプロジェクトへの参加を命じられた」とコ

ダイは言った。「私は艦長として航海に出る予定だ。そこで 1 つ提案がある」

「なんでしょう」

「生活班長森雪という名目で乗艦する気はないかい」

「それは私が森雪ではないことを知った上でのお誘いですか？ 何のために？」

「消えたガリアデスが気になる。航海に出ると何かに出会ってしまうような気がする。そのとき、黒色人に詳しい君のアドバイスが欲しい。他の関係者はガリアデスのことなど考えてはいないのだけどね。僕は気になって仕方がない」

「分かりました。喜んで」アルフォンはすぐに返事をした。

地球防衛軍でも、ガリアデスの件と太陽の件を連動させて考えている者はほとんどいない。しかし、コダイは考えた。アルフォンはコダイに惚れ直した。

そしてヤマトに乗り込めば、モリユキ抜きでコダイと過ごせるのだ。
断る理由などあるわけがない。

アルフォンは、身体に密着したセクシーな艦内服を着ることができてご満悦だった。これでコダイを悩殺できる。しかし、よく考えるとコダイはこれを着たモリユキを見慣れているわけで、アルフォンとは受け止め方が違うかも知れなかった。

アルフォンは頭を切り替え、生活班長モリユキとして若い乗組員を指導し、コダイの役に立とうとした。

そして、ある日アルフォンはコダイに呼ばれた。

「太陽の異常増進の理由は、バース星に発射されて命中しなかった惑星破壊プロトンミサイルが太陽に命中したためと判明した」

「ガリアデスに関係ないわけですね」

「いや」とコダイは顔を曇らせた。「これにはワープ機能があって、太陽まで到達するのは不自然ではないのだが、よりによって正確に我々の太陽

に命中するということがあり得るだろうか」

「確かに偶然にしては出来過ぎです」アルフォンはうなずいた。

「ガリアデスの関与はあり得ないだろうか」

アルフォンはピンと来た。

命中しないで宇宙の彼方に飛び去ったミサイル。ガリアデスがそれを回収してコースをセットし直して地球の太陽を狙う。地球の人類皆殺しという黒色人の報復だ。脱出のためのタイムラグがあるから、逃げることはできるかもしれない。しかし、少なくとも、母星に住み続けることはできなくなる。ガリアデス一隻でできることはこれぐらいだろう。

「確かに有り得そうです」

「しかし、別のニュースもある」

「なんでしょう」

「ボラー連邦によって、調査船が破壊される事件が起きているが、実は調査船以外にもボラー連邦に破壊された残骸が発見されている。どうやらガリアデスの残骸らしい」

「ボラー連邦にとって、黒色人は敵ですから、たまたま遭遇したガリアデスを敵と認識して撃沈した可能性はあります」

「それは初耳だな。黒色人とボラー連邦は敵?」

「黒色とボラーは星間戦争を行っていました。しかし、そこでガルマン・ガミラスが勃興し、ボラーの主たる敵はガルマン・ガミラスに変わりました。戦争の手間から解放され、戦力が余剰になった黒色は地球を攻めたわけです」

「そうか。黒色がイスカンダリウムを欲しがったのも……」

「対ボラー戦で利用するためです」

「ヤマトがこれから乗り込むのは、ガルマンとボラーが対峙する世界か」

「そうです。かなりの危険を覚悟すべきです」

「では、君は地球に送り返すべきだろう」

「いえ。同行させて下さい。危険だからこそ、アドバイスが意味を持つはずです」

「君は……。ありがとう。ユキには聞かせられない台詞だが、君がいてくれて良かった」

アルフォンはコダイから口づけされた。

どうやら、最愛の人にはなれずとも、コダイの二番目ぐらいにはなれたようだ。

しかし、アルフォンは別の問題を発見してしまった。

生活班長として過去の資料をチェックしているとき、自分の席に座っていた別の誰かを発見してしまったのだ。

書類上は真田澪となっている。

女性だ。

しかし、帰還したヤマトには女性など1人も乗っていなかった。

ヤマトの戦闘詳報をチェックしても良く分からない。

戦死の記載が無いのだ。

真田澪がヤマトに乗り込んだことは確実だ。

ヤマトでも活動の記録がいくつも残されている。

しかし、死んだ記録が無い。

もちろん、艦を降りた記録も無い。

地球に戻ったヤマトをアルフォンも出迎えたから、女性が降りてこなかったことは確認している。

いったい、どこに消えたのだ。

アルフォンは1つの記述に注目した。

真田技師長の姪。

アルフォンは確認を要すると考え、工作室を訪問した。

女性にうとい真田は、まだアルフォンを森雪だと信じていたので、すんなりと話を聞いてくれた。

しかし、真田は真田澪の名を聞くと、少し狼狽した。

「真田澪という女性には乗艦記録があるのに、降りた記録がありません。戦死の記録もありません。姪御さんのこと、何かご存じではありませんか」

「ヤマトが航海を無事に終えたら話そう。今はショックが大きすぎるかもしれない。航海中に語ることはない」

アルフォンが驚いたことに、航海は無事に終了した。太陽の異常増進は抑止され、地球から逃げ出す必要もなかった。それもこれも、コダイの力だった。驚いたことに、コダイはガルマン・ガミラスの指導者デスラーと酒を酌み交わす仲だったのだ。ガルマン・ガミラスから様々な便宜を受け、ボラーの妨害をはね除け、ハイドロ・コスモジェン砲で太陽は無事に元の姿を取り戻した。

真田滯の件を、真田はやっと話す気になってくれた。ドック入りしたヤマトの工作室で、真田は話し始めた。

「真田滯とは、実は偽名だったのだ」と真田は告げた。

「偽名？」

「そうだ。実は真田滯はイスカンダルのサーシャだったのだ」

「イスカンダルが破壊されたとき、コダイマモルと一緒に脱出したイスカンダル人の赤ん坊ですね。しかし、子供は乗艦者名簿に載りません。便乗者名簿に載ることはあってもです」

「ヤマトに乗ったとき、サーシャは十六歳だったのだ」

「意味が分かりません」

「そもそも、スターシャは人間ではなかった。イスカンドロイドだ。墓守ロボットが自分を女王と偽っていたにすぎない」

アルフォンは知っていた。

「そして、古代守も、実は死んでいた。イスカンドロイドに残留した意識を転送して蘇らせたものだった。そして、そのことを知っていたので地球に帰るわけには行かず、イスカンダルに残留した」

それもアルフォンは知っていた。

「では、赤ん坊のサーシャとは何者か。実はこれもイスカンドロイドだったのだ。スターシャの遺伝情報と古代守の遺伝情報から合成されたイスカンドロイドだ。しかし、イスカンドロイドは成長しない。より成長した

身体に順次取り替えながら数年から数十年掛けて大人になっていくのが予定されたプロセスだ。それによる子育ての疑似体験。それこそが、スターシャと古代守の望みだった」

「それは初耳です」

「そうだろう。古代守本人からそれを聞いているのは私だけのはずだ」

「それで?」

「しかし、イスカンドルは自爆した。イスカンドロイドの製造プラントは失われ、設計図も失われた。しかし、娘が成人できないことを不憫に思ったのだろう。スターシャは成長した娘の身体的设计図だけは古代守に託して脱出させた。古代守の望みは、その身体を完成させ、娘を大人にすることだけだった」

「まさか」

「そうだ。私は古代守から娘と設計図を託された。設計図は今も理解できないが、とにかく図面通りに作ることはできた。足りない部品は赤ん坊のサーシャの身体から調達できた。こうして十六歳のサーシャが誕生した。しかし、いきなり赤ん坊が十六歳になったら誰もがおかしいと思うだろう。だから、私の姪ということにして、真田澪を名乗らせた」

「そもそもなぜサーシャという名前だったのですか? 地球に波動エンジンの設計図を届けて死んだ地球の恩人の名前ですよ?」

「うむ。その理由も実は分かっている」

「なぜですか?」

「火星で死んだサーシャも同じようなプロセスで成長したので、いくつかの世代の身体は残されていた。赤ん坊時代のサーシャの身体を再利用した娘なので、サーシャなのだ」

「とても人間らしい話とは言えません」

「イスカンドロイドの話なのだ」

アルフォンはため息をついた。

「それで彼女は怎么样了のですか?」アルフォンは次をうながした。

「サーシャは古代を愛してしまい、古代もまんざらではなかった」

「まさか」

そのサーシャは恋敵ということになる。

「しかし、イスカンドロイドは人間に奉仕する存在。自分は愛し合う存在ではないと知ると、デザリウム残留を希望した。愛と奉仕を両立し、古代の役に立って死ぬにはそれしかなかったからだ。そして、デザリウムの突入口を開いてくれた」

「戦闘詳報にも書いていません」

「そこは機密として封印されている」

「それでどうなったのですか？」

「デザリウムは難攻不落と甘く見たのだろう。警備員もいなかったのに、サーシャは目論見通りに突入口を開いてくれたが、それに気付いた聖総統がサーシャを撃ってしまった。その結果として、逆上した古代は波動砲を後先考えないで撃ってしまった」

「真田さんなら撃たなかったと？」

「いや、自分でも撃とうとしたよ。サーシャがイスカンドロイドだと知っている以上、あれは撃つべきだった。自分で作り出した以上、とても愛着はあった。だから壊すのは忍びなかった。しかし、殺人にはあたらない。役目を果たして壊れるのも機械の本懐だ」

アルフォンは真田の一部も狂っていると確信した。

「つまり整理すると、ということですか？」

「聞こう」

「スターシャは墓守のイスカンドロイドとして、イスカンダルを掘り返す行為は許せなかった。まして、戦争目的など言語道断。だからイスカンダルを自爆させても死者の平穏を保ったと。そしてコダイマモルは、娘のイスカンドロイドの成人した姿を見ることを目的に生き延びたので、それが見られたあとは喜んで自爆できたと。サーシャは、イスカンドロイドとして人に奉仕して死ぬことを選んだと」

「おおむねそんなところだ」

「悲しすぎる運命ですね」

「しかし、イスカンドロイドとはそういうものだ」

「サーシャの復活、コダイマモルの復活は可能でしょうか？」

「コダイマモルに関して言えば、人格データのバックアップは残っているが設計図が無い。サーシャは成人の身体のみ設計図があるのだが、いくつかのパーツがどうしても手に入らない。手に入る見込みも無い。地球流のアンドロイドとして再生することは可能だが、それを行って幸せになる者はいないだろう。巧妙に死んだ者を模倣する機械を作り出すだけのことだ」

「そうですね」

アルフォンは考えた。

そして別の考えに思い至った。

本当は別の目的があったのではないか。

スターシャから見た黒色人は、イスカンダルの大地を踏みにじろうとした者達。イスカンダルを守ろうとしたガミラス人達を大量に殺した者達。スターシャは復讐しようとしたのではないか。もちろん、イスカンドロイド一体でデザリアムは破壊できない。しかし、身を挺して波動砲を撃たせることはできる。

つまり、デザリアムに残留してヤマトの攻撃を誘導すること。それこそが最初からスターシャによって仕組まれた復讐劇ではないのか。

もちろん、それは憶測に過ぎない。

ただ単にスターシャは夫と娘を愛していただけで、夫と娘が愛に報いないで死んでしまっただけ、という解釈も有り得る。

しかし、スターシャ陰謀説はアルフォンの頭から離れなかった。もしそれが事実なら、実は母銀河を滅ぼした相手は地球人というよりも、スターシャになる。

状況は慌ただしかった。

地球に到着したヤマトは即座にドック入りした。

真田の発案で、森雪の記憶キューブをヤマトのメインコンピュータに直

接リンクする改造が行われたのだ。

本来藤堂の秘書であるアルフォンは、その段階でヤマトを降りて秘書業に戻った。

その頃は、アルフォンにはいくつかの難題が降りかかってきた。

アルフォンの正体を知っている地球人が若干いたのだ。

最初は始めの頃にいろいろと面倒を見てもらったマリアから電話が掛かってきた。

「ごめんね。彼がどうしても古代さんをゆするというの。うっかり森雪はアルフォンさんだと話しちゃったから」

しかし、この問題はすぐに収束した。

森雪は偽物だと言ってきた男に対して、古代は一笑に付したからだ。

「僕は 2199 年以來ずっと付き合いがあるんだ。別人が化けてもすぐ分かるよ。それより、僕の婚約者に文句を付けるとはそれなりの覚悟があるのだらうね」

相手は逃げ出したという。

しかし、もう一人はそれほど単純では無かった。

諜報部の慰安パーティーの時の映像が存在していたのだ。穴という穴で男に貫かれ、体じゅうに雪が降る光景が鮮明に残っていたのだ。

そして、それをネタに揺すってくる者がいた。

あのときに参加した者だと言っていたが事実かは分からなかった。相手の人数は多すぎて全ての参加者を覚え切れていないのだ。

アルフォンは悶々としたが、三日目にあっさりと決着が着いた。

アルフォンの態度がおかしいことに気付いた藤堂が、警備部に調査させてゆすり犯を捕まえたのだ。

しかし、それでもパーティー画像がどこまで流布しているか分からなかった。同じ画像でアルフォンを揺すろうとする男が出てくるか分からない。

地球防衛軍司令部内ですら、この動画のコピーを持っている者が何人もいたのだ。

これはかなりの問題だった。

調査の手はどこまで広げれば良いか分からないほど広まった時点でコダイの耳にも入ってしまった。

アルフォンは嫌われることを覚悟しながらおそろおそろ藤堂のオフィスに出頭した。

ところが、意外なことにコダイの反応は落ち着いたものだった。

「似たような動画なら持っているよ」

コダイが持ってきた動画は、よく似た内容ではあったが、場所も顔ぶれも見覚えが無かった。

「こんなことをした記憶はありません」とアルフォンは言った。

「そうだろう」とコダイはうずいた。「これはヤマトに乗る前のユキの動画だ」

「えっ?」さすがに一同が驚いた。

「何かを約束する前に何をしようと、縛ることはできない」とコダイは言った。「むしろ、これだけ経験がありと僕なんかと付き合っても面白くないかも知れない。そっちの方が心配だ」

「そんなことはありません」と慌ててアルフォンは言った。「あなたに不満などありません」

「そうか。なら問題は無いな」とコダイは言った。

それからコダイは藤堂を振り返った。「この動画は婚約前に撮られたものということにしましょう。ユキが似たような行為を行っていたのは事実です。そして僕は婚約前に相手が何をしようと気にしない。そういう噂を流して下さい。それで、この動画は揺すりの手段にならなくなります」

「やはりモリユキが惚れた男です。素晴らしい対処です」とアルフォンは歓声をあげた。

「いやそれほどでも……」

「もう、こんなことは二度としないと誓います」アルフォンはコダイに抱きつき、コダイは神妙な表情になった。

しかし、コダイとはすぐに別れ別れになった。

ヤマトはコダイらを載せてテスト航海に出て行ったが、アルフォンは残ったのだ。たかがテストにアルフォンは必要無いと考えられたからだ。

ところが、ヤマトの任務は途中で変更された。

ガルマン・ガミラスとの連絡が突然途絶したのだ。

ヤマトはガルマン・ガミラスの首都であるデスラー・パレスにそのまま直行していった。

アルフォンは悪い予感がした。

事実、それは的中した。

ヤマトから連絡が途絶したのだ。

呼びかけても応答しないヤマトは自動操艦で地球に戻ってきた。

アルフォンはヤマトに急いだ。

そして、先頭に立って第一艦橋に駆け込んだ。

全員がその場に倒れていた。

アルフォンは頭が真っ白になった。

モリユキとは、何かがあれば我が身を挺してコダイを守ると約束して、自分もそれを果たしたいと思ったのに。それなのに、自分が乗っていないときに限ってこんな悲惨なことが起こるとは。

アルフォンは、銃を自分の頭に向けて撃とうとした。

「ばっかっ」

真田に叩かれて、アルフォンの自殺は未遂に終わった。

そしてアルフォンは考えた。

艦内の全員が死んでいるように倒れているのになぜ真田だけ動けるのだ。

真田にはどこに違いがある。

そうだ。手足が義手だ。いや、それは本質では無いはずだ。他には心臓補助のメカブースト機構が埋め込んである。それが違うだけだ。しかし、あの仕掛けは死んだ人間の心臓の役目を肩代わりできるほどの力はない。つまり、真田の心臓は死んでいるわけではない。死んだように活力が低下しているだけだ。

アルフォンはようやく真相にたどり着いた。

「急げっ! みんなまだ死んでいない。心臓を刺激するんだ」

アルフォンはコダイに心臓マッサージを始めた。

医療スタッフが電気ショック装置を持って駆け寄ってきた。

「これを使います」

「お願いします。急いでっ」

コダイの蘇生を確認してホッとしてからアルフォンは艦内の立体映像装置でモリユキと対面した。

「ヤマトに何があったのだ?」アルフォンは質問した。

「突然不明の敵に襲われました。防御できないミサイルが命中すると乗組員を仮死状態にする放射線が放出されました」

「それで操艦不能に?」

「そうです」

「でも自動操艦で帰還できた」

「私は重要な機器との接続が切られています」とモリユキは言った。「あくまでまだ実験段階ですから。だから、乗組員に代わって操艦することはできますが、接続が切られていました」

「でもできた」

「ええ。岩に当たった衝撃でスイッチが接続されました。これで安全にヤマトを自動航行させられました」

「でも連絡が付かなかった」

「通信機との接続スイッチは誰も入れてくれなかったからです」

それが応答の無いヤマトの状況か……

結局、元気になったコダイがやったことは辞表の提出だった。

アルフォンはトーダーが辞表を却下すると思っていた。なぜなら、コダイぐらい優れた艦長は他にいないからだ。特に、遠隔地で外交官として振る舞うときのコダイは別格だった。

それだけに、素直に辞表を受け取ったトーダーの態度は意外だった。

「森君」とトードーは言った。「この人に連絡してくれたまえ」

アルフォンはメモを見て驚いた。

そこにはあり得ない名前が書かれていた。

沖田十三……。

宇宙戦艦ヤマト初代艦長つまりコダイの前任者だ。

ガミラス戦役で地球を救って死んだと聞いていた。

まさか生きている？

ならばコダイの辞表を受け取った理由も分かる。まだ若いコダイよりも、実績が豊富だからだ。

アルフォンは車で海沿いの療養地走った。

そこで、髭が豊かな老人が椅子に座って海を見ていた。

この人に間違いない。

「オキタ……ジュウゾウ……ですね?」

男は振り返った。

「森君か」

「トードー長官の命により、ヤマト艦長への就任を要請に来ました」

「古代はどうした」

「コダイは辞表を提出しました」

「ところで君がアルフォン君だね?」

「どうしてそれを……。それはトードー長官とコダイ艦長しか知らないはず」

「藤堂なら時々来てくれる。わしがこうして生きていることは秘密なのでね。会いに来られる相手は限られている。藤堂はたまにアドバイスを求めに来る」

「では私のことも」

「知っている」

「しかし話は変わりません。私は艦長就任をお願いするように命じられました」

「わしはもう死んでいる」

「生きているではありませんか」

「実はこの身体の九割は機械の部品に置き換わっているのだ。そもそも、最初に蘇生された時ですら八割が機械に置き換えられた。もうすぐ十割が機械になるだろう。それでもわしを活かしておきたいと思う者達がおる。迷惑なことだ」

「しかし地球を救った英雄ですから」

「もしも十割が機械になったらわしはわしでいられるのだろうか。そもそも今の状態ですら、本当のわしが生きていると言えるのだろうか」

「首から下が全て機械でも黒色人は生きていました」

「では君の見解を聞こう。私がヤマトの艦長に復帰してまで行うべき仕事があると思うかね？ 他のベテランの誰かには一任できないのかね？」

「残念ながら。トードーの手伝いで上級将校の査定データは全て見えますが、この難しい状況を乗り切れる人材は……」

「難しいのかね？」

「敵はディンギルです」

「ディンギル？」

「アクエリアス・チルドレンの種族の一つですが、奇矯な宗教を持ったやっかいな相手です。我々もボラーも彼らの版図は避けて通っていました」

「どうやっかいなのだね」

「我々の常識では、誰もが死ぬのはいやです。ですから、装甲の中に隠れようとします。しかし、彼らは死を怖れません。死ぬことは前提です。ですから、平気で仲間を見捨てます。海戦では強力だが装甲が無い等しい水雷艇で戦い、陸戦では生身の身体を剥き出しにしたロボットホースで戦います」

「藤堂の考えがやっと分かった」とオキタはうなずいた。「目の前で自発的に死体の山が築かれる。そんな戦いを古代は指揮できない。そのような光景に耐えて冷静な判断ができるほどまだ人間はできていないだろう」

「ですがコダイも優秀です、私は彼をヤマトから降ろすことには賛成できません」

「古代もわしもヤマトに乗れというのかね？」

「はい。おそらく地球最後の総力戦です。手を抜いたら壊滅します」

「わしはこれまで、もう自分の出番など無いと思っていた。やりたいことは全てやった。しかし、わしにはまだ1つだけ心残りがあると分かった」

「为什么呢？」

「森君と古代のカップルは十分に見て、結婚するに値すると確信を持った。しかし、アルフォン、君と古代はまた別だ」

「私は試される……ということでしょうか？」

「堅苦しく考えることはない。仮想空間で森君とよく話をするのだが、森君は君に太鼓判を押した。しかし、わしは自分の目でアルフォンという女性を確かめねばならない」

「では、ヤマトに乗艦してくれますか？」

「ただし条件があると藤堂に伝えてくれ」

「为什么呢？」

「古代が戦闘班長、アルフォンが生活班長だ。この人事を飲むならこの老体に鞭を打とう」

アルフォンは、オキタとは良い人だと分かった。それはアルフォンが提案した人事そのものだったからだ。

ヤマトが地球を出発した後、アルフォンは格納庫に出向いた。

古代の乗るコスモゼロが整備中だった。

「複座仕様にシートを換装しておいてもらえるかしら」アルフォンは言った。自然に森雪の言葉に聞こえるように喋れるようになっていた。

「なぜでしょう？」

「情報分析のために、後席には私が乗ります」

「しかし、いきなり訓練もされていない者がコスモゼロに乗るのは……。」

Gが探索艇とは大違いですよ」

「大丈夫です」とアルフォンは微笑んで見せた。

実際、情報部将校としてアルフォンは鍛えられているのだ。モリユキの

身体になっても、訓練は欠かしていない。高 G 機動にも対応できる。

アルフォンは古代が飛ぶときは同行する心の準備ができていた。

おそらく、ディンギル相手なら一人で対処できない状況が起きるはずだ。

そして、そのことは後から証明された。

負傷した古代はコスモゼロで偵察に出た。アルフォンは強引に後席に乗り込んで彼をフォローした。ヤマトの超長距離砲撃で母艦を撃破できたのは、アルフォンのフォローのおかげだった。

結局、ディンギルは強かったが弱かった。主導権を取っているときは強いが、逆転の秘策を仕込まれた瞬間に瓦解する戦闘が多かった。

だが、ディンギル軍が打たれ弱いことと、地球の危機は別問題だった。

ワープさせられた水惑星アクエリアスは、ディンギル軍の敗走とは無関係に地球に接近した。

アルフォンは艦長室に呼ばれた。

「アルフォン君」

「はい」

「献身的に古代に尽くす君の態度を見てわしは確信した」

「なんでしょう」

「君になら、古代を任せられる」

「自信がありません」

「大丈夫だ。わしが保証する」

「しかし……」

「君は森君の身体を奪った。古代は君の母星を破壊した。お互いにしてはならない罪を背負った。だから互いの罪を支え合って生きるのがいちばん良いのだと思う」

「ですが……」

「そう。わしも罪を背負った。死ななくても良い者を、多く死なせてしまった」

「艦長」

「わしはヤマトを自爆させ、アクエリアスからの水流が地球を水没させ

ることを阻止する。その引き金を引くことがわしの贖罪だ。そして、百パーセント機械にされる前に行うことができる最後の人間らしい行為だ」

「艦長……」

「古代を呼んでこい」

「はい」

「よい子を産むのだぞ」と艦長は笑った。

アルフォンはヤマトのメインコンピュータに接続されたモリユキの記憶キューブを取り出した。そして、古代と共に艦長に挨拶して退艦した。

そしてオキタは自爆し、ヤマトはアクエリアスの海中に没した。

死に際のオキタの承認は、コダイの踏ん切りを付けさせたようだった。

アルフォンは、コダイと結婚し結ばれた。

そして間もなく娘が産まれた。

美雪と名づけられた娘は、モリユキに似ていたが、アルフォンは大切に育てた。

娘を育てながらの夫婦生活はコダイとアルフォンを本当に夫婦のように心を接近させた。

アルフォンは徐々に過去を忘れてコダイの妻としての日々に没頭するようになった。

ある日、かつてのヤマトでコダイの部下だったナンブがやってきた。

ナンブは告げた。

「我が社の新型貨物船の第1号、これを古代艦長に贈呈しようという話になったんだよ。宣伝効果も抜群だ」

「新型貨物船?」

「そうそう。辺境でも活動できる航続力と、海賊対策の武装も持った船だよ。最近建造される船にしては重武装だから、ここは軍の経験者に使ってもらえるとアピールになるってね」

「なるほど。それで船名は?」

「決まっていない。オーナーの君が付けるといい」

「なら、ゆきだ。これしかない」

「奥さんの名前か。それもいいな。うん。それもアピールできる。森さんも、いや、ミセス古代も地球を救った英雄の一人だからな」ナンブは喜んだ。

ナンブが帰った後で古代はアルフォンに頭を下げた。

「済まない。貨物船ゆきには、ユキの記憶キューブを取り付けて、彼女自身として扱いたい。ずっと君との時間を過ごしてきたが、その間も後ろめたかった。これからは、ユキとの時間を過ごしたいんだ、アルフォン」

アルフォンは自分が無理をしていると分かっていた。しかし、無理に微笑みを作って言った。

「あなたの思うとおりにして。私はいつまでも美雪を育てて待っています」

「すまん」また古代は頭を下げた。しかし、それでアルフォンの心の痛みが消えるわけではなかった。

古代はアルフォンの手の中から消えてしまったのだ。

しかし、行くなどとは言えなかった。

モリユキとの約束は子供を産むまで。

一生コダイを独り占めして良いという約束ではなかった。

それに、アルフォンには身体を勝手に奪ったという負い目があった。

新しい輸送船のクルーを集めたホームパーティーが行われた。

副長の大村や、航海士の桜井など十人近いクルーが集まった。

アルフォンは手料理で彼らをもてなした。

「美味しいですよ、奥さん」と桜井は喜んでくれた。

「ありがとう。彼が浮気をしないようにちゃんと見張っていてね」

「はい」

「彼が惚れていいのは私と『輸送船ゆき』そのものだけよ」

「辺境は女っ気が少ないですからね。たぶん大丈夫ですよ」

「それでもゼロじゃないでしょ？ 彼が私と艦載コンピュータ以外の女と話をしていたこっそり教えてね」

冗談めかしてアルフォンは桜井にお願いをした。

「はい。注意して見ておきますよ」

娘の美雪はすっかり桜井に懐いていて、キャッキヤと喜んでいた。

まあ桜井はイケメンだからしょうがないか。

それに対して、大村の方はまさにやもめのおっさんだった。

娘が大村に近づかないようにアルフォンは配慮しようと思ったが、娘も大村には興味を示さなかったので助かった。

それから一年して忘れたところに桜井から手紙が来た。

『古代船長には浮気の兆候も無いので安心して下さい。奥さんからの荷物を開くときがいちばん嬉しそうですよ。艦内コンピュータと話し込むことはあまりありません。むしろ、大村副長の方が熱心に艦内コンピュータと話をしているぐらいです。よく、バーチャル映像ルームで長い時間過ごしているのは大村副長の方です。古代船長はそういう時間もほとんどありませんよ』

アルフォンは考えた。

どうもおかしい手紙だ。

記憶キューブのモリユキの人格と過ごすために宇宙に行ったはずだ。それなのにアルフォンが送る小包の方に喜ぶというのはおかしい。しかも、大村の方がモリユキの人格の話し相手になっている可能性すらある。どうということか。まるで倦怠期の夫婦ではないか。

それでも、喜んで貰えるなら定期的に送る小包には力を入れるようにした。

真田の訪問はそれからしばらくしてだった。

真田は、引退した藤堂の推薦だと言い、アルフォンに移民船団の代表に就任するよう、要請してきたのだ。

「詳しい話をお聞かせ下さいますね？」

真田は話した。

銀河中心方向から来るブラックホールに、地球は間もなく飲み込まれるという。

アマールの衛星が移住先に決まり、移民船団が組まれるのだという。

その第一次船団代表を頼みに来たのだった。

「でも理由が良く分かりません」

「秘密は聞きました」と真田は言った。「あなたは森雪ではなく、黒色星団帝国のアルフォン。銀河中枢の事情に明るいあなたなら、他の誰よりも安全に移民船団を目的地に連れて行けるはずだ」

「しかし、ボラー壊滅後の銀河情勢はあまり詳しくありません」

「それでも大多数の地球人よりも詳しいのです。就任をお願いします」

「しかし……」

「実はかつてのあなたの上司からも推薦を得ています」

「誰？」

「グロイザー・トリプルエックスです」

「なぜあなたがグロイザー部長のことを……」

「実は、我々が建造した波動実験艦ムサシの運用を、元黒色情報部のグロイザーさんと元部下に委託していました」

「いったいどうして……」

「人間女性の身体を奪ってしまった彼女らは地球上にいても風当たりが厳しいので、隔離する意味でも宇宙での勤務形態を作り出しました」

「でも、私は情報部最年少のたかが元少尉ですよ。推薦される理由が分かりません」

「あなたは、黒色人でありながら、藤堂長官の信頼を得てずっと地球のために働いた。それは元同僚の誰もがなしえなかった快挙なのです。あなたは、彼らから見ても光り輝く英雄、スターなのです」

「買いかぶりです。それに、ガリアデスのようにムサシも乗り逃げされたらどうする気ですか。アクエリアス・チルドレンの住む星々はそれこそ

無数にあって、そのうちのどれかから戦力を引き出せれば地球を滅ぼせるかもしれません」

「グロイザーさんは、そんなことはしないでしょう」

「なぜ確信出来るのですか？」

「地球は間もなくブラックホールに飲み込まれます。今行すべき事は、地球への復讐を考えることでは無く、同胞を地球から脱出させることです」

「確かに……」

「メッセージを預かってきています」

サナダはメッセージカプセルを取り出した。

既になん年を取ったグロイザーの顔が浮かび上がった。

後に見えるのは赤毛の女はジオリンに違いない。

「アルフォン」とグロイザーは言った。「もはや、一刻の猶予もありません。地球だの黒色だのとこだわっている時代は既に終わりました。全員が一丸となって生き延びねばなりません。地球人の英雄の身体と、黒色軍人の知恵を兼ね備えたあなたが先頭に立たねば、問題は解決できません。我々も地球人研究者を支援するためにムサシを運行させています。もはやブラックホールは不可避と分かりました。ですから、移民船団は何としても成功させねばなりません」

そして映像のグロイザーは微笑んだ。

「任せられるのはあなたしかいません。頼みましたよ、アルフォン」

そこまでだった。

「少し考えさせて下さい」

その夜。

アルフォンは娘に正体に関する話は除いて事情を話した。

「提案を受け入れるべきかしら」

「受け入れるべきよ」と娘は言った。「これ以上お母さんが無理をするのは見ていられないわ。無責任なお父さんにお母さんが拘束される必要なんてないわ」

「そうなの?」

アルフォンと美雪は血が繋がっていない。美雪の母親側の遺伝子は森雪のものなのだ。しかし、そうであっても気持ちの上では本物の母娘だった。娘の言葉は母親として嬉しかった。

「いいわ。移民船団の司令官の提案、受けるわ」

エピローグ

サナダ教授が手記を汎銀河言語に翻訳すると、それは移民船団の司令官就任を受諾するところで終わっていることが分かった。

おそらく、そこまでしか書けなかったのだろう。

司令官になれば仕事が増えて手記どころではなくなったのだろう。

サナダ教授には、その事情は容易に想像ができた。

「ここで話が終わってしまうのは残念です」とカンサク・バッツが悔しそうに言った。

「そうですね」とサナダ教授はうなずいた。

地球史はここから先が異説の多い混乱領域に入っていくからだ。

しかし、サナダ教授は少なくともこの手記に満足していた。

自分がどのように死んだのかの経緯が書かれていたからだ。やはりデザリウムで聖総統に射殺されている。他の経路から調べた結末と同じだ。きっと、コダイのために死んだのだろう。

だから今の自分には人を愛する心が残っていない。あのときに、コダイのために死ぬことできっと愛を使い切ったのだ。

今は、研究欲しかない。

そのとき、サナダ教授はハッと気付いた。

「もしかしたら太当たりですよ」とサナダ教授は微笑んだ。

「なぜですか?」

「私は内容を解釈できない記憶キューブを1つ所有しています」とサナダ教授は手で四角の形を作って見せた。「その記憶キューブが解釈できるかもしれません」

「記憶キューブ?」

「私的な遺言で、嚴重にロックされていましたが、経年劣化でロックは壊れて中身を読めました。私的な遺言ですから相手に分かる言葉でしか書いてありません。しかし、この手記と照らし合わせれば解釈できるかも…」

「どんな内容です?」

「今、コピーを転送させます」サナダ教授は端末を叩いた。

拝啓、アルフォンさま。

私は貨物船「ゆき」の副長。大村耕作です。

この手紙はアルフォンさまのみが開封できるようになっています。

死ぬかも知れない決戦を前にしたためです。

まず、最初に謝らねばなりません。

私はアルフォンさまのことについて、かなり多くのことを知っております。

というのは船載コンピュータに接続された森雪さんの記憶キューブを通して、いろいろなお話しを森雪さんから聞いているからです。もちろん機密事項なので誰にも話をしていません。

なぜそんな機密事項を聞いているかと言えば、実は私が森雪さんの愛人のような形になっていたからです。

地球連邦科学局長官の真田志郎の発明による触れるバーチャル映像により、実は森雪さんとのセックスは可能になっていました。しかし、古代船長はそれをあまり積極的にはお使いになりませんでした。その代わり、私がこっそりと森雪さんの相手をしていたわけです。私は年配のやもめオヤジですから、扱いやすかったのでしょう。便利に使われてしまいました。

しかし、私から寂しがる森雪さんの人格に話しかけて慰めてしまったのも事実です。

私も酷い男だと思います。

私自身は、何かあったら戦闘になって死ぬ覚悟で古代船長に協力して、

ケジメを付けるつもりです。それが古代船長の本来の婚約者、森雪さんと不義密通してしまったやもめ男のケジメ付け方です。しかし、そのことは誰も言えません。森雪さん評価に傷が付くからです。

ですから、これを告白できるのはアルフォンさん。あなたしかいません。だからここに告白を残します。

もちろん、この手紙が読まれる可能性が低いことは分かっています。

しかし、たとえ読まれずとも死ぬ前に告白を残したかったのです。

最後にこれだけは言うておきましょう。

アルフォンという名前は公式に言うてはならない名前です。

ですから、古代船長はあなたのこともユキと呼んでいました。

古代船長がユキと言ったとき、八割はあなたのことでした。古代船長が気に掛けていたユキは、八割があなたのことでした。古代船長は娘の移住先の確保のために、アマールを巡って戦うでしょう。それが終わったら、アルフォンさん。行方不明になったあなたを探しに長い旅に出ることでしょう。

そして再び巡り会える日が来ることをお祈りしております。

追伸

森雪さんの記憶キューブは貨物船「ゆき」から取り外され、ヤマトの艦長室にあります。しかし、スイッチが入っているのを見たことはありません。既に興味が無いのが、それとも消耗が早まるのを嫌って滅多にスイッチを入れないのか自分には区別ができません。

終わり

解説

本作は、**ヤマトよ永遠に**のアルフォンを主人公として物語を再構築することを意図している。その際問題になるのは、アルフォンは物語の途中で死んでしまうことだ。これでは発生した事件を最後までアルフォン視点で追うことができない。そこで、黒色人が目的とした肉体の奪取が既に成功していた、という解釈を採った。その際、アルフォンが使用する地球人の肉体とは森雪の肉体であろう、(そのためにアルフォンは森雪を確保したはずだ)、という前提に立って、性転換小説的な内容を付与されている。しかし、そのような事実は秘匿されるはずなので、明らかになるのは遠い未来という体裁を取っている。

その他、作品の多くの疑問点について解釈を付けているが、あくまで本作の解釈であり、それが正しいという主張ではない。

ちなみに、ヤマト復活篇で SUS と戦闘を行うか悩んでいる艦長室の古代が聞いている森雪の声は、実は艦長室にある森雪の記憶キューブが発する声だという解釈になっているが、本作にその部分の描写は存在しない。その場にアルフォン本人は立ち会っていないからである。

遠野秋彦作品宣伝 2013/12/14 版

リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡

受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか！そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか！

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊！

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラークはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ！

ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として扱われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通の子供高生校の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも.....。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？ だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説！

君は腕力では無く知力を試される！

ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか！ 勇者の伝説を！ このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を！

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ！

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな！

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか！

イーネマス! 【全編(完結)PDF 版】

http://www.dlsite.com/maniax/work/=product_id/RJ039225.html

イーネマス! 【立ち読み版(全 16 章のうち第 5 章まで。無料) PDF 版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来入制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱することができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり

